

第8回銀華文学賞発表

銀華文学賞

銀華文学賞もおかげさまで八回を迎えることができました。今回もまた日本全国およびアメリカ、インド、ブラジル、フランスなど海外から、四十一篇の作品が寄せられました。心から御礼申し上げます。

多数の応募作の中から、選考委員／大高雅博・八覚正大・小沢美智恵・都築隆広・五十嵐勉による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。今回もさらに歴史小説に優秀な作品が目立ち、昨年新設した歴史小説賞を継続させていただきました。

また本年も故河林満を偲んで、御遺族の御厚意により河林満賞を選出させていただきました。

なお、誌面の都合により、奨励賞などの作品は四五号以降に順次掲載させていただく予定です。御期待ください。

第八回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇一二年一月二十八日（土曜日）午後二時より東京の大田区民プラザにて「文芸思潮」エッセイ賞／現代詩賞／イラスト・漫画賞といっしょに行なう予定です。どなたでも御参加可能ですので、どうぞお誘いの上御来場ください。

第九回銀華文学賞も昨年とほぼ同じ要領で行ないます。皆様の御応募を心からお待ちしております。

※選考に当たり、小林広一氏、早川ゆい氏、中野睦夫氏に御協力をいただきました。

当選

「転ぶ女」 冴場 渉（千葉県旭市）

「デスペラード」 牧港誠之（神奈川県横浜市）

河林満賞

「二初」 皆笹麻希江（大阪府大阪市）

歴史小説賞最優秀賞

「淡雪―実朝の死―」 北風嘉己（北海道札幌市）

優秀賞

「埋み火」 土岐田耕（大阪府大阪市）

「言葉は武器なり」 六藍光洋（兵庫県神戸市）

「蓋」 丹羽加奈子（愛知県名古屋市中区）

「片影」 星野 透（埼玉県所沢市）

「仙薬」 上野雄三（福岡県中間市）

「蕎麦の花」 神通明美（富山県富山市）

奨励賞

「一期一会」 寺田 保（北海道函館市）

「萩の器」 北野滋子（大阪府大阪市）

「ポスト」 坂口保典（長野県小諸市）

「宅老所『なごみの園』」 飯島もとめ（長野県長野市）

「青春の守破離」 小林良之（兵庫県三田市）

「リバーズ」 宮澤えふ（兵庫県赤穂市）

「悪霊」 朝永 潔（大阪府大阪市）

「明白な運命」 二宮英郷（東京都渋谷区）

「声が響く」 岡野弘樹（兵庫県加古川市）

「藍色のキャンバス」 宮下浩子（東京都世田谷区）

「闇を抱きしめて」 国方 勲（大阪府枚方市）

「振り込み」 荒井隆志（東京都練馬区）

「ヒヤリハット」 小野友貴枝（神奈川県秦野市）

「妹、幸」 北上 実（新潟県新潟市）

「ラッキー」 平沢裕子（岩手県花巻市）

歴史小説奨励賞

「舞草刀」 久保協一（岩手県盛岡市）

「小倉百人一首実朝歌余談」 尾崎克之（千葉県松戸市）

「北の独裁者の死」 迎来太郎（東京都稲城市）

「異聞保元の乱」 小笠原新（山形県酒田市）

男の華と渴き

八覚 正大



この賞も第八回目を迎えることになった。そんななやってきたのかなと思うが……たしかに選評も八回目になる。うれしいことに質が向上したことは確実に言える。人間が密に終結することの結果だろう。その中から押し上げられるようにして秀作が立ち上がるものだ。

今回、目に吸いついてきた原稿があった。それは牧港誠之の「デスペラード」である。無法者、命知らず、ならず者など多少のニュアンスをもつてその英語のタイトルを訳せよう。また映画、音楽にも同様のタイトルのある。が、作者が主人公に与えた目線は一読すれば自ずとわかるであろう。

俗に言う港湾労働者の内部が描かれるが、その現場の言葉遣いが実にうまく使われていて、その実態を知らないものも納得した気持ちになる。その場は流れてきた者たちのある種「吹きだまり」なのだが、その中に高校時代、ラグビーをやり県の決勝にまで進んだ過去をもつ佐々木亨がい

る。語り手のおれは佐々木のことかどこか気になり、仲間として付き合っていく。佐々木は元警察官だったようだ。それが過去に事件を起こし身を落として港湾労働者として働いていたのだ……。

とにかく文が生ききている。労働者仲間の現場の葛藤あり、人間関係あり、飲み屋あり（そこにいる女への佐々木の思ひも描かれ）……ラストは、過去の事件で警察に追われていた佐々木が、かつてのラグビー選手の花型を彷彿とさせるステップを踏んで刑事たちをかわすシーンだ……結局捕まってしまう。しかしその一瞬の栄光の再現は眩しいまでに耀きをもって「おれたち」には見えたのだ。

ハードボイルドという言葉やヘミングウェイを持ち出すまでもなく、ここには男の人生の一瞬の華とは何なのか——が見事に描かれている。この作者は、以前にも「沖繩海洋もの」とでもいえそうな優れた描写による秀作を何作も出してはいる。しかし、今回そこから新たな描き方で華麗なステップを踏み直した感がある。以前から作家の自覚はあったと思う。しかし今回あらためて、この作者を「作家」と呼び直したい。純文学に踏みとどまったまま、面白い作品群をさらに創り出してほしいものだ。

そしてもう一人、「作家」と呼ぶにふさわしい作者を見出す。冴場渉である。今回の受賞作は「転ぶ女」だ。過去に愛した女は、今は落ちぶれて病になり葉漬けの日々を送

佳作

- 「津波」 成瀬秋彦（東京都練馬区）
- 「思えばいと疾し」 形山謙一（山形県山形市）
- 「ミュンヘンに死す」 南城堯也（埼玉県日高市）
- 「イエスの島で」 波佐間義之（福岡県中間市）
- 「千花の壁」 来の宮あんず（東京都江東区）
- 「耳たぶ」 吉野光久（神奈川県横浜市）
- 「赤い月夜に」 佐々木国広（滋賀県東近江市）
- 「転校生」 室町 眞（東京都杉並区）
- 「若いメル友」 浦上京子（大阪府寝屋川市）
- 「三代目のカフェ」 奥はじめ（COURTÉVOIE FRANCE）
- 「誰かが静かにやってくる」 山田吉生（栃木県宇都宮市）
- 「三日間」 耕田みずき（北海道札幌市）
- 「笛の誼」 三山晃生（埼玉県深谷市）
- 「桜」 小林理樹（東京都小金井市）
- 「三凶神」 秦純四郎（北海道小樽市）
- 「微笑み返し」 折口 真（埼玉県所沢市）
- 「夢想の雲」 大和川義之（大阪府堺市）

- 「鮎返しの滝」 中川ガバチャ（和歌山県和歌山市）
- 「原っぱの幽霊」 小笠原幹夫（埼玉県狭山市）
- 「心残り」 富田鈴子（愛知県名古屋市中区）
- 「鮎」 藤沢辰雄（奈良県大和郡）
- 「聖夜に舞う雪」 松尾 修（長野県上伊那郡）
- 「晩秋の稜線」 宇和静樹（大阪府堺市）
- 「駅前茶屋日録」 久間 一秋（福岡県小郡市）
- 「ペーパー・フラワーズ」 潤野恵子（東京都江戸川区）
- 「波の裏」 成瀬健太郎（神奈川県藤沢市）
- 「喫水線」 田浦夏美（東京都練馬区）

歴史小説賞佳作

- 「三増峠」 松田征士（東京都町田市）
- 「遠い灯」 岡本 晶（京都府宇治市）
- 「幻の松尾城」 吉田満春（千葉県山武市）
- 「七良屋の達磨」 碧居泰守（千葉県松戸市）
- 「じろう」 木山省二（東京都板橋区）
- 「残照」 上田英博（高知県香南市）

っている。その女を再訪する男のまなざしは、取り切れない責任を未だ抱えつつ、痛ましくやさしく切ない。その様が見事に描かれている。

実は彼は「哀愁のティラノ」(ティラノはティラノザウルスとのこと※編集部注)この作品は「決別の川」と改題して文芸思潮26号に掲載)という作品を何年前だろうか、書いたことがある。主人公の男から見た過去の女・家族への視線が、人生の経験を経た男の自負と切ない痛み・疲弊を伴った見事な表現として表わされていたと思う。そのときから注目してきたのだが、少し生々しすぎる「骨肉の町」などを経て、今回、ここまで一人の女との関わりをまざる男を描いている。「デスベラード」が、男の過去の華の再現という「表」とするならば、この「転ぶ女」は、かつて快楽を共有しあった仲間への鎮魂という「裏」の顔である。その鎮魂は惨めな姿をさらす相手へのまなざしだ。男が逃げたようなラストだが、しかし男は逃げてはいない。その痛ましさを自らの内に内在化させ背負っているのだ。《哀しくはなかった。ただ、渴いた気分がした》という一行は、この作品の掉尾を飾るにふさわしい。

今は亡き、小生の文学の戦友・河林満の傑作に「渴水」という小説があった。内容をここで書くつもりはないが、男の哀切さは詰まるところ「渴き」に行きつくのかもしれない。

縄が生き続ける意味——が、今一つ鮮明に見えなかったのかも知れない。力のある作者なので今回は選者たちが辛かったと思われる。

「ペーパー・フラワーズ」(潤野恵子) 神経を病み、後年認知症の入った母親を介護する娘と父親。ラスト近くの、母親がトイレの中に閉じこもり紙の花を溢れるほどに作ったシーンは圧巻。

「ボスト」(坂口保典) 現代の集合住宅事情が実によく描かれている。筆者も団地住まいであり、理事も経験しているので、このようなエキセントリックな事態にはリアリティが感じられる。内容の点では優秀賞と思われる。文はもう少し推敲されて描写を鍛えてほしい。

「宅老所」(なごみの園) (飯島もとめ) 一人ひとりの登場人物への暖かいまなざしが、なかなか良い。読んでいて気持ちや和んでくる。ただ、どこかエッセイ的ではあるの。小説としての評価は今一つだった。

「仙葉」(上野雄三) 発想や導入はなかなかだし面白くは読めたのだが、やはりあり得ない? と思わせる点、饒舌すぎる点がやや興冷めだった。

「闇を抱きしめて」(国方勲) 人間的な美術の教師の生き方を、若い教師の視点から見た小説。少し前の時代の教員と学校制度はよく描かれているが、この美術教師の闇、芸術性の部分が今一つ伝わってこなかったのが残念。

歴史小説部門で良かったのは、「淡雪—実朝の死—」(北風嘉巳)と「小倉百人一首実朝歌余談」(尾崎克之)の二作である。両者とも実朝を扱っている。前者はわかりやすく読みやすい。ただラストが少し弱い気がした。後者は実朝暗殺を扱った少しミステリアスなものでディテールと歌の多用が読ませた。ただ、その真実性はなかなか検証し

たく評価は分かれるかもしれない。『金槐和歌集』を一応目を通して選考に臨んだが、情景を詠む歌が多い中で心の苦しみや個の絶唱のようなものは、古にあって近代の自我の芽生えを先取りしたようにやはり驚きを禁じ得ない。

「舞草刀」(久保協二) は迫力は感じたのだが、忍びの者の活躍への焦点の当て方が唐突だったりわかりにくかったりした。忍びの者を用いた者の意図か、用いられた者の生きざまかのどちらかに焦点を絞って描いてもらいたかった。以下は感想程度だが、印象に残った作品に触れてみたい。

「蓋」(丹羽加奈子) タイで事故に遭い頭蓋の一部を失った男の話。発想が面白く、ふた、ふた、ふたというリフレインが効いている。過去に三人の子を育て苦勞した再婚の女房が、しっかりと蓋となったという感覚は、けっこうピタッと嵌った感じがした。

「愛華」(丸山史) 文はなかなか良く沖縄の女性のおおらかな姿が、愛華と言う妊娠した高校生に娘になかなかよく表されていたと思われる。優秀賞くらいでも良いと思えたのだが、他の選考委員の支持はあまり得られなかった。沖

「言葉は武器なり」(六藍光洋) パリ留学中に出会ったクメール・ルージュ親派の学生と主人公との交流。年月が経ち、彼が殺されたことをカンボジアの現地に入って知る……話題的にはなかなかだが、その学生との出会いから主人公自身がどう変わったのか——そこが描かれていないので、

河林満賞の創設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は銀華文学賞に応募される小説作品を対象にし、銀華文学賞選考委員によって銀華文学賞選考会において同時に選考され、御遺族の承認によって決定されます。

受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が銀華文学賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」

文芸思潮

どこか他人事の域を出ないような印象になってしまったのが残念。

「明白な運命」(二宮英郷) エネルギッシュな文体と性描写を得意とする作者。銀華文学賞の常連中の常連。スケールの大きさや、性のおおらかさはこの作者ならではのもの。しかし今回は、ちよつと大きすぎる時代の内容をやや粗っぽく捉えた感が……。

「蕎麦の花」(神通明美) 事故で怪我をした男性が、過去に情を通じた女性から励まされ回復していく話。俳句もなかなかとは思いますが、少し男性の独りよがりな感も。

「藍色のキャンバス」(宮下浩子) 公園で出会った六十代の男の絵を売ってあげる九十歳の老女の思い。ちよつと着想は面白かったが、絵の描写などもっとほしい。

「振り込み」(荒井隆志) 売り物の古札を取り替えて借金を返した男。しかしその行為を見られ強請られる……。設定、発想などなかなか読ませた。しかし、ラストお金を払ってしまふところが、何か尻切れトンボと言う感じ。

「ラッキー」(平沢裕子) 息子を自死させてしまった母親のそれからの人生。施設で飼われていた犬に息子を投影する情の部分はなかなかだが、息子が自死するところは唐突。病死とか事故死の方が……。

「一期一会」(寺田保) 召集された男性が戦場での負傷者薬殺の事実を知る……。内容は重く、迫力も感じられるが、

覚がほしかった。

「喫水線」(田浦夏美) 夫と叔母との三人生活に嫌気がさした主人公の女性の話。シチュエーションと叔母コンプレックスの男性は描けているがラストが平凡。タイトルに溺れた? 感じ。

「天使の仮面」(鶴飼勝) 香港に逃げ、客引きをするようになった男の話。親切な男の仮面はわかるラストも良いが、テーマがわかりにくい。

「文が痛い」(鈴木英夫) これも常連の作者。発想はわからないでもないが、メールのやり取りの域を抜けてはいかず、人間の情の部分の絡みが感じられない。メールの持つ限界をえぐり出すとか、実際に出会って意外な出来事が起こるとか……もっと展開を期待する。

「一初」(皆笹麻希江) 浮気の話。飄々としたところが読ませる。かなり力のある作者だが、うまさの先に立つて、考えさせるようなところは感じられなかった。

「イエスの島で」(波佐間義之) カネミ油の事件を追ったテーマは重いものだが、一人の妊婦に背負わせてしまったのは重すぎて暗く、読んでいて切ない。岩に昇華させてしまふのは逆に文学としては物足りなかった。

どこか幻想と事実が混在してしまっているようで、読んでいると何かわからなくなってしまう。一度会っただけの女性、さらに出てきたり、幻想なのか……。

「津波」(成瀬秋彦) 中年デザイナーの若い同僚への嫉妬心はよく描かれている。そのような個人的な感情体験と、大地震・津波との関係がもう少しこねれないと……。

「赤い月夜に」(佐々木国広) 幼い娘にいたずらをした労働者をつきとめ撲殺してしまう男の話。恨みの成り済ませたミステリアスな部分は読ませるが、こっそり打ち明けられても読者はどこか戸惑ってしまう。

「波の裏」(成瀬健太郎) 母親の回想と老いるの恋情。文章がしつとりとっていて、情感を感じる。波の裏という表現は納得。

「千花の壁」(来の宮あんず) 姉コンプレックスの主人公の偏執はけっこうよく描かれているし、うまいと思う。しかし世界がどこか怨念的で狭い。それが解かれ拓けていくような部分を描いたら面白いと感じた。

「声が響く」(岡野弘樹) 人格の乖離した少女の姿と母親、それからお祖母ちゃんとの出会い。視点の問題を作者は狙ったのかもしれないが、残念ながらわかりにくかった。

「晩秋の稜線」(宇和静樹) 命の恩人を死刑執行する警吏の話。内容は重く苦しいところはあるのだが、死刑執行官の話はすでに世に出ている。なにかさらにオリジナルな感

文学者としての目

小沢美智恵



今年の候補作には力作が多かった。

応募資格四十五歳以上。さすがが長年書いている作者たちだけあって、なかなかの技術である。

しかし、巧い、面白いとは感じて

も、「受賞作」にふさわしいかとなると今ひとつ決め手がなくて、今年は該当作は出ないかも知れないという思いで選考会に臨んだ。

他の選考委員も似たような気持ちだったらしく、どれを受賞作にするかで長時間話し合いが続いた。

たとえば、土岐田耕「埋み火」は、老齢の男性と若い女性の心の駆け引きが巧みに描かれ、なかなかこうは書けないと感心させられる小説だが、読んでいくうちに男性主人公の自慢話を聞かされているような気がして鼻白んでしまふ。

上野雄三「仙薬」は、不老不死の薬という非現実的な話を巧みな語り口で読ませて、エンターテインメントとしては優れた作品になっているものの、最後の締めくくり方がありがちで、せつかく奇想天外な物語を仕立てたのだから

ら、もつと読者を驚かせるような終わり方はなかったかという欲が残る。

丹羽加奈子「蓋」は、事故で頭蓋骨に穴が空いた男が過去を思い出す話で、穴から様々な記憶が出入りするさまをリズムカルに描くテンポのよさに魅力があるが、読後その描き方しか印象に残らないうらみがある。

星野透「片影」は、昔交際したことのある女性の姿がくつきり浮かび上がる味のある作品だが、本題に入る前が長すぎ、随筆風すぎる嫌いがあった。

また、北風嘉己「淡雪―実朝の死―」や尾崎克之「小倉百人一首実朝余談」、久保協一「舞草刀」など歴史に材を取った作品は、資料をよく調べていてそれぞれ読ませるが、「歴史小説」という型にはまりすぎてはいはしまいか。

そんななかで受賞作として浮上してきたのが、冴場渉「転ぶ女」と牧港誠之「デスペラード」だった。

「転ぶ女」は、還暦に近い男性の語り手が、かつて関係のあった女性・美雪から病氣療養をしているという電話を受け、家に見舞いに行つてずるずる交流を続けてしまう話だが、内部に過剰すぎる「女」を抱えた美雪という女性に際だつたりアリティがある。夫がいながら他の男性ときわどい関係を持つて恥じない彼女と語り手の関係はおぞましいといつていい様相を呈するし、内容に救いもないのだが、身勝手な女の存在感が確かに残り、そこに固有の人生があ

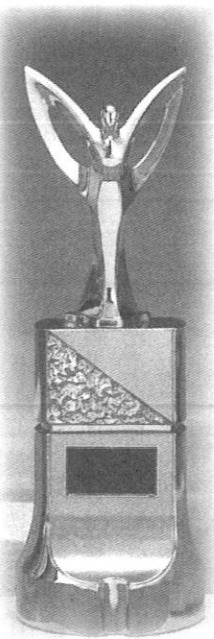
ることを感じさせる。

この美雪のような生き方は、良識的な世界からは負の部分として排除される類のものだろう。一般社会で生活している人々は、その排除された部分を黙殺、あるいは見まいとする。しかし実際にわたしたちの生きる世界というのは、排除されたとまじいものをも包みこんだ、より大きな象徴的宇宙として把握されなければならないものである。文学の役割のひとつが、そういう排除された部分を表現することであるなら、人間の負の面をしっかりと見据えた「転ぶ女」は、文学たりえていえるのではないか。

そのような負の部分を負った人物を描いているという点では、「デスペラード」も同じで、主人公の仕事仲間・佐々木が、物語が進むにつれ警察に追われるような犯罪型の人物だということが明らかになってくる。この作品は主人公たちの仕事である港湾作業の実際を詳細に描いてもおり、その筆力に安定感もある。

授賞にあたっては、この二作者が当文学賞の常連の入賞者であり、選考委員が彼らの作品を複数読んできたということもプラスに働いた。「この二人の作品には作家性がある」と評した委員がいたが、一連の作品を読んで、わたしもその評言が本質をついていると感じた。

小説家は小説を書いているときだけ小説家であるのではないだろう。映画を見ているときでも、スーパーで買い物



しているときでも、恋愛しているときでも、常に文学的に物事をとらえる訓練を無意識のうちにしている。文学者として実人生にたずさわると、その文学者としての目が、二作品には色濃く反映している気がしたのである。

最後になったが、河林満賞には、皆笹麻希江「一初」が選ばれた。六十七歳になるフォトスタジオの店主が、パートの面接に来た綾乃という女性に一目惚れして囲う話である。妻と娘に隠れてうまいことをしているはずの店主・猛男が、いつのまにか女たちにしてやられている感じが、関西弁をうまく使つて軽妙に語られている。女の強さを標榜してまことにうまくできた小説だが、妾宅の庭に咲く花の名前「一初」をタイトルにしたところが、わたしには惜しく思われた。作者は使者という花言葉を使つて作品とタイトルを結びつけ、そこに意味を持たせようとしたのかも知れないが、作品の自然の流れに従つてあっさり終わらせ、タイトルも直球勝負でつけたほうがずっとよかつたのではないか。

圧倒的な筆力

大高雅博



今回は大地震があり、早くも、それを取り込んだ作品が最終選考にも何作が残つたということが特筆される。ただ、震災に遭われた方が、それを小説にするには余りにも時間がないと思われ、その周辺か、外側の人の手によるものと考えられる。かなり微妙な問題があり、描き方は難しい。震災を自分が受けたのと同じような真摯な気持ちで書かれているのがわかる作品もあるが、今回は上位には推せなかった。震災を扱うには、より繊細な、別のやり方が必要なのだろう。

また今回、かなりの作品でありながら、この人の力量であれば、これくらいは当然であり、前よりは良くないという理由で、上位に上がれなかったものもある。八回目ともなると色々な採点要素が入ってくる。

さて、今回の当選作であるが、牧港誠之「デスペラード」冴場渉「転ぶ女」に決定した。両者とも前から力量は評価されていた。牧港氏は沖縄の海を題材とした存在感のあ

る作品があり、筆力は認められていた。最近では都会に題材を取ったものに変わっているが、前作は主要人物設定に無理があるようだった。今回は纏まりが見られる。ただ、結末については、賛否が分かれた。人物達には存在感はあるのだが、さあ、それでというようなことがあるのも事実である。

冨場氏は、昨年の優秀賞「骨肉の町」の印象が強い。「骨肉の町」は兄弟の確執の話であったが、今回は男と女の話であり、良くも悪くも病気であるその女性の存在感が凄く。前作とは全く違ったシチュエーションで、選考会当日まで、「骨肉の町」の作者とは気が付かなかった。こちらも結末がどうかという気はしなくてもないが、両者とも圧倒的な筆力があつたように思う。

今回時代物で選ばれたうち二作が源実朝に関するものであった。北風嘉己「淡雪―実朝の死―」は一般的イメージとは違う名君としての実朝であり、尾崎克之「小倉百人一首実朝歌余談」は詩歌の方に重きがある。実際、詩歌の解釈というような所に進むと、よくわからない部分ができ、評価が難しくなる。下読みの段階で、高句麗の話があり時代物としては良いと思つたが、最終には残れなかった。時代物の範囲については検討の余地があるかもしれない。

優秀賞では上野雄三「仙薬」が高得点を集めた。長寿菓の話で、中々巧みであるが、結末がもうひとひねり欲しか

または、そこまでいたっていないものもある。どこまでが経験で、資料に基づくものかわからないものもある。要は、どこまで、資料、自分の思いを消化して、小説化するかということになるのであるが、この間の距離感というようなものが、難しい。格闘して下さい。

クメントモリ 死を想えよ は間隙の時代に

都築隆広



上位争いは、「デスペラード」「仙薬」「蓋」「転ぶ女」そこに「片影」「埋み火」が迫った、といったところでありましょうか。

当選作となつた「デスペラード」は作中にイーグルスの楽曲だと説明

があります。三十代男子ならアントニオ・パンデラス主演の銃アクション映画を連想するかも知れません。これが若者向けの雑誌でしたら、「え？ 当選作のタイトルが『デスペラード』？」と難色を示しますが、六十七歳の作者が書き、高齢者の投稿によって支えられる銀華文学賞ならユニークだと思ひ、私も推薦しました。何をしているんだかさっぱりわからない港湾労働者達の仕事も筆力できちん

つた。神通明美「蕎麦の花」は交通事故で身体が不自由になつた男の復活の話である。昔、多少の心の動きがあつた年齢の離れた若い女性が現れ、希望を得る。その昔の出来事はもつと、軽い方が普通に思えるのだが、読後感良かったと思う。

奨励賞の国方勲「闇を抱きしめて」は進学校内部での、先生達の確執であり、中では美術教師の描き方が良かった。ある時代を写し取っている感じがして興味深く読ませていただいた。ただ、興味ある素材だけにもう少し整理した方がよいかも知れない。

朝永潔「悪霊」は、学園もの、いじめを題材としたホラー小説であるが、最初から最後まで安定した緊張感があり面白かった。いじめられている方が逆転するのはなかなかのアイデアだ。もつと、長い方が良いのではとの声もあつた。さらに先まで進めてもよいかも知れない。

宮下浩子「藍色のキャンパス」は、九十歳の女性がホームレスのような画家の絵を売り歩くというような話で、印象的であつた。

宮澤えふ「リバーズ」は前世占いのようなものを使いがらちよつと、しゃれた物語にしている。

この他にも、クメール・ルージュ、カネミ油症、死刑執行、マンション問題と、書かなければならない題材を元にしているのが目立つ。中にはうまくいっているものもあり、

読ませ、なんといっても、ラストシーンのやりとりが男のロマンでした。ちなみに、「これが男のロマンだったなんて、私は読んでいて思いもよらなかった」とは小沢美智恵選考委員の弁であります。女にはわからない世界なのです。

もう一つの当選作は「転ぶ女」。女のわがままがリアルといえますか、なんともひどい性格で、それに拮抗するぐらゐ男性の性格も悪い。その一癖も二癖もある人間ドラマが何故だか味わい深く、これもまた読ませます。また優秀賞の「埋み火」や「片影」も同系統の作品だと思ひました。恋愛における男の傲慢さや思い込みの強さがよく描かれていて、シリアスなのに滑稽で、しかし技術的には高度でした。ただ、その昔、山田詠美氏が文学界新人賞の選評で候補作に対して再三、こぼしていたように「登場人物達の関係が素敵じゃない」という評が、この三作にも当てはまります。即ち「自分が今、書いている小説の人物達は、他人から見ても、素敵な人間関係を築けているのだろうか？」という問題で、文学性とは直接、関わらない部分ですが、芸誌というステージで小説を書くにはやはり頭を悩ませるべき事柄ではないでしょうか。

続いて、「仙薬」は典型的な魔術的リアリズム小説です。ありそうもない話なのに、物語が巧みでありそうに見える。特に財布を届けたという、ありふれた語り出しが効果的でした。異界へと読者を導くには、ありふれた場所から誘わ

ねばなりません。でも、オチはいまいちでした。最後さえ書き換えられていれば、当選作だったでしょう。

「蓋」は文章がリズムカルですらすら読めます。この小説に登場するタイのシラチャーには私も一ヶ月程、滞在したことがあって、信号もないような最悪の交通事情の場所です。ここなら交通事故も起ります。この作品も幻想的な内容に反し、実話っぽい要素がある点が支持できました。

私のイチオシ作品は上位争いには参加できなかった奨励賞の「一期一会」。東北関東大震災の破壊を直接描くよりも、それを連想させる戦時中を描いた方が今の時代の風潮に合っているのではないかというのが持論ですが、戦争体験者にしか描くことができない、真摯な内容が世代に関係なくストリートに届きます。原稿用紙三三枚とは思えぬ内容で、特に後半に登場するCOLな看護婦のキャラクターに惹かれました。その反面、再登場したヒロインが幻想めいているとの批判が選考委員から相次ぎ、確かに細部は矛盾だらけで弁護しきれませんでした。

下読み委員の間で話題沸騰だったのは、姑のような夫の叔母とのバトルを描いた「喫水線」です。ただ、「単なる嫁姑ドラマなのでは？」という五十嵐編集長の鋭いツッコミにぐうの音も出ず、佳作止まりでした。もし、「下読み賞」なる枠がございましたら、橋田壽賀子ドラマの熱心な視聴者でもあるこの私が、個人的に差しあげたいところです。

の方針通り、数にはこだわらず、あくまで作品の質を重視し、レベルとして高いものはすべて三次予選以上とした。

このグループだけでなく、一次通過レベルでもかなりアップしており、それぞれにある程度の普遍的な内質を備えていて、箸にも棒にもかからない未熟な作品はほとんど姿を消した観がある。これらのことは、応募者の力が鍛錬によって上がっていると同時に、力量豊かな書き手が、この賞に眼を向け、応募してくるようになった側面も表しているだろう。経歴を見ると、一流新聞の元デスクとか、有力な賞の最終候補作家とか、華々しいキャリアが目立つ。いきおい三次予選以上は激戦で、百花撩乱の饗宴に、選考委員は候補作の多さを含めて戸惑いかなり迷ったというのが本音である。

しかし全体のレベルは上がったということは実感しても、トップの最優秀賞をどれにするか、銀華文学賞の顔として推せるかという段になると、さらに要求が高くなることも否定し得ない事実である。その点では、今回断然というほど突き抜けたものはなく、何が何でもという意気込みで推薦できる作品はなかった。優秀賞以上はほとんど並んでおり、どれが当選となってもおかしくはなかった。

最優秀賞に輝いた冴場渉氏の「転ぶ女」は、女性のなやかなよりかかる一面の権化を見事に人格化して、その姿を悲劇にまで追い詰めている。冴場氏は奨励賞や優秀賞に

ところで、今回の選考会で上位が「津波」ネタで占められているようなら反対しようと思ったのですが、他の選考委員の方々も同じ考えだったらしく、「思えばいと疾し」津波「転校生」といった「津波」をテーマにした作品はいずれもふるいませんでした。三作とも人間ドラマは上手かったのですが、やはり人命が失われている問題なので、発表時期が早すぎました。人々が破壊を忘れかけ、次の大事件が起るまでの間隙の時代が、必ず訪れます。そうした平和のなかで、死を想えよと論ずるうちに、あの「津波」を思い出し、描いてゆくのが一番でしょう。もし五年後、十年後にこれらの作品が発表されていれば、上位陣を入れ替えさせるぐらいの力を秘めていたと思えました。

積み重ねの輝き

五十嵐 勉

第八回目の銀華文学賞は、全体にレベルが上がった。特に三次予選近辺の層はいい作品がたくさん集まって、どれに涙を飲んでもらうか、予選担当者一同で苦慮した。結局当初



何度もなっている銀華文学賞の常連ではあるが、一貫して負の領域の人間の生き様に光を当てている。その虚無的な陰影は、暗鬱な領域を這い回らざるを得なかった氏の人生の苦渋をそのまま投影している。それがまた独特の灰白色のトーンを奏でて、深い味になっている。その人生体験を経て初めて持つことのできる運命への眼差しは、絶望に裏打ちされた光への信仰である。文学によってしか救われない人間の投げ出された姿がそこにある。これまでで最も結晶度の高い作品は、何度もの挫折を越えての到達感がある。その積み重ねの上の輝きに心から賞賛を贈りたい。

同じく当選作となった「デス・ベラード」の牧港誠之氏も、銀華文学賞で何度も注目を集めている作家で、特に沖繩の漁師を題材にした作品は光っていた。今回は横浜の港湾を舞台にした小説で、わかりやすく、まとまりがよかった。私としては沖繩を素材にした作品を読んだときのほうが強烈な印象があり、本質的な輝きを覚えたが、あときは当選作に推しながら同意が得られなかったことに、残念な思いがあった。賞には運というものがあり、それをたぐり寄せるのも力のうちかもしれない。牧港氏も苦渋に満ちた人生を経て、負の領域で力強く生きる者の輝きを描いて、硬質な味を醸している点では、冴場氏と共通したものがあ

るものがある。二人の「男」の作家の軌跡に拍手を送りたい。「埋み火」(土岐田耕)と「一初」(皆笹麻希江)も当選圏内の作品だったが、他の選考委員の支持が得られなかった。

「埋み火」は老年紳士の三五歳年下の女性との精神的な恋愛である。知性や年齢によって抑制されている分よけいに燃焼感が強く、ゲーテの言う「親和力」のようなものによって濃密に燃えさかる男女の性の奥が見える作品となっている。男女間の引き合う力は、年齢差も超え、互いの家庭も超えて炎の柱としてこの世界に立つ熱いエネルギーを開示している点で、恋愛の本質を覗かせている。こういう力が仕事や生き方に還流してくる大きなダイナミズムを匂わせている点でも、ひろがりを感じる。この作品には、大規模なスケールで動く社会のある部分のリアリティが裏打ちされていて、その動きに実際に携わってきた確かな感触が、文章の風格となって香りを高めている。最後がもつと抑制のうちに燃焼を純化できたら、文芸作品としての結晶度が高まっただろう。これだけの恋愛は多くの人が読むものとして残すに値するだろうし、いずれ本にもなるはずなので、そのときにもう一度引き締め、磨いて、純度の高いものにしてほしい。

「一初」は、粋な作品で、流れのよい軽妙なタッチは芸が高い。歯切れよく、小気味いい文のリズムは、低く高く起伏をしながら流麗な調べを奏でている。関西弁と上方の「異聞保元の乱」(小笠原新)、実朝をめぐる「小倉百人一首実朝歌余談」(尾崎克之)、唐に対して戦い抜いた高句麗の將軍を捉えた「北の独裁者の死」(迎來太郎)など多彩で、佳作を含めてこの領域における熟年層の充実を感じた。

今回優秀賞の数が多かったのも、やはり力を持った作品が多く集まったためで、どの作品も独自の領域を造形していた。六藍光洋氏はエッセイ賞でおなじみの書き手だが、今回「言葉は武器なり」という小説に挑戦し、カンボジアのポル・ポト時代のことを描いて、強烈な世界を切り取った。フランスの留学生カンボジア人の同僚との苦学の交流を通して、クメール・ルージュのために尽くしていた彼が帰国後逆に殺される運命を辿ることで、ポル・ポトの政治の陰惨な一面が体感されるところに、小説としての成立がある。留学生時代の貧しさを貫いて祖国のために献身する彼が、むしろ留学生であったために殺される悲劇性は、カンボジアの殺戮の時代の狂気を戦慄として伝えてくる。あの時代を体験を通して実感として描いている小説は日本の文学ではお目にかからない。価値の高い作品である。ただ、タイトルがテーマを象徴していないのが惜しまれた。「言葉は武器なり」という言葉は留学生時代には外国人であり赤貧に耐える彼にとって苦難を乗り越える赤裸裸な言葉であったことはよく伝わってくるが、帰国後逆にフランス語

気質が生きて文章に溶け込んでいる。男の浮いた心理などをよく捉えて、文体に乗せて生き生きと踊らせている。ところどころにチクリと気のきいた描写や一文が光を放っている。この文章の芸は一流である。読むことのなかに酩酊感を覚えさせてくれるまれな文章は、河林賞に値する。

歴史小説賞は今回たくさんの秀作が寄せられた。なかなかお目にかからない記録の掘り起こしが多数あって、歴史のおもしろさ、過去の豊かさをあらためて堪能させられた。なかでも鎌倉幕府三代將軍実朝を扱った北風嘉己氏の「淡雪―実朝の死―」は、大江広元を軸に実朝や北条氏の人間群が鮮明に描かれていて、当時の輪郭がくつきりと蘇ってきた。オーソドックスな筆致は、落ち着きがあり、その沈着さが悲劇を浮き上がらせている。知られていることではあるが、その臨場感はあらためて歴史の本質を剔出して、明瞭さを備えている。労作の結晶と言える。

剔出という点では久保協一氏の「舞草刀」も、戦国の東北大名家の存続をめぐる陰謀が緊張感のある筆致で描かれていて、読み応えがあった。その彫琢においては、「淡雪―実朝の死―」に勝るとも劣らないが、題材が知られていない点、また出だしのシーンがチャンバラ風で通俗に受け取られがちな点で損をしている。昨年に続いてよく掘り起こされている力作であることはまちがいがなく、持続力をも含めてその力を確認した。歴史小説は、保元の乱を扱った

を学んでいたことが災いして知識層としてツールズレンで虐殺されたとすれば、「言葉は災いなり」という逆のテーマが持ち上がってくる。この関連をどうするか、考え切っていないように思われた。殺される段階になって、裏切られたにしてもなおかつその言葉を抛り所にし、カンボジアのどこかに書き残していたりすれば、この言葉は真にタイトルになっていただろう。文学としての処理が完結していない恨みがあった。

丹羽加奈子氏の「蓋」は、頭蓋骨を除去して脳が開いたままの意識を興味深く展開していて、意識の一つの存在模様を開き示している。その大胆な設定は評価できる。体験をフィクション化して脳や意識の危うさ、脆さを剔出した手腕は鋭利で、最後も愛情に包まれたユーモアによって災厄を乗り越えるシーンも理知の鮮やかな一閃が走っている。ただ、ここまで見事な構築をしたのなら、さらに深く意識の構造を存在や愛情の根底まで掘り下げられそうな気がもする。奇怪さ、奇妙さだけでなく、恐怖の領域にまで迫り得たら、さらに強烈になっただろうし、愛情というものの力も大きく剔出できただろう。

星野透氏の「片影」は、実に読ませる作品で、文章に宿る心理の翳がコクのある職人芸でひしひしと伝わってくる。よく煮込んだ滋味ある料理を味わっているような気分が堪能させられた。文章としては星野氏と皆笹氏が今回の応募

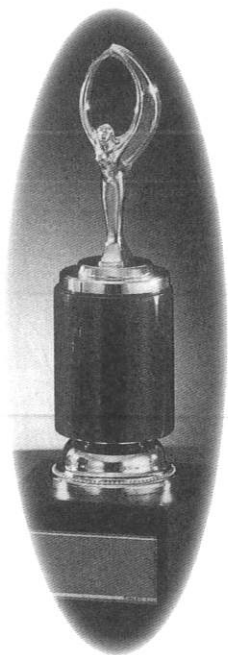
作の中では双璧だろう。文章の機微でじっくりした味を読ませる作品は、そうはない。地味な素材であっても、その女性の姿はいつまでも人生の深い味として残る。たまらない残像がある。続けて河林賞を受賞してもおかしくない作品だった。

神通明美氏の「蕎麦の花」は素朴な作品だが、交通事故ですべてを失った男が、ふとした異性の愛情の記憶で生きる力を得て再生するストーリーである。単純でも、生きる意志を回復する過程は確かな感動があり、フィクションに託された筆者のある体験が籠められているところに、読後感の快い信頼が備わっている。蕎麦畑の白い蝶の描写は胸に残る。

上野雄三氏の「仙葉」は、古典的な題材を現代のグローバル化した世界のなかに復活させたものだが、不老不死の薬を商売にする話を、実にうまくおもしろく作り上げている。この超現実的な、しかもだれもが願望する、あまりにも普遍的な話は、現代に蘇らせようとすると眉唾ものにならざるをえないのだが、それを感じさせずに読ませていく筆力は、きわめて高いものがある。ちなみに予選では最高点で上ってきた。「賽乃目」といういかかわしい主軸の男は小説的な魅力がたっぷり、こういう人物を造形できる手腕だけでも、注目に値する。ここに漂う雰囲気、嘘だとわかっていながらのめりこむ人間の業の深さと繋がって

引きこもり気味の青少年が、逆にある力に取り憑かれ、奇怪なパワーをもって現実を逆転させていく変異の姿を示している。これらは現代の青少年層を浸食しているある奇妙な力を象徴しているようで気にかかった。「悪霊」は筆力のある展開で一気に読ませるが、到達したところは入り口で、これからほんとうの物語が始まるという地点で終わっている。長篇にすればもっといろいろ出てきそうな気配がある。これで評価するのは惜しい気がした。たまたま三作が集まっただけなのか、それともこれが現実の一部を實際に示していて、根はもっと深いのか、時代の恐怖に繋がっている危惧も払拭できなかった。

総じて、銀華文学賞に寄せられてくる作品は質量ともに上がっている。熟年、老年パワーが開花しつつある。次回もさらに大輪の花群を期待したい。



いて、博打や詐欺に身を投じる負のスリルを濃く立ちこめさせている。ただ、最後が時間がなかったせいか、あっさりして物足りなさが残ったため勝ち抜けなかった。編集・発表の段階で推敲してもらったが、それが成功しているかどうかは、読者に委ねたい。力量を買う。次作を見たい。

今回の応募作のなかで、触れておかなければならない作品群が二つある。一つは東北大震災を素材にしたもので、予選から上ってきたものだけで三作あった。「思えばいと疾し」(形山謙一)と「津波」(成瀬秋彦)、「転校生」(室町眞)がその素材だが、タイムリーで話題性はあるし、うまく材料を小説の構築の中に組み込んであるもの、地震と津波という対象があまりに大きすぎて、どうしても真正面からは受け止めきれない物足りなさがある。圧倒的な大自然災害とその底に沈む人間の悲惨さと向き合い、それを文学作品として提示するには、本気で立ち向かっていく覚悟と気合いがいる。「津波」は表現の力も高くそれを心理に重ねる手腕も光っているが、この斜めの姿勢で文学賞に受け入れてしまうと、流行に流れる危険がある。あえて評価を抑えた。

もう一つの気になる作品群は、学校の子供たちの内面の気味悪さを扱ったものである。「悪霊」(朝永潔)、「誰かが静かにやってくる」(山田吉生)、「声が響く」(岡野弘樹)は登校拒否など学校生活でいじめられる立場にある生徒や、



選考会風景／アジア文化社新社屋地下図書室で

授賞式&祝賀会・懇親新年会

読者の皆様、今年も「文芸思潮」銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・イラスト漫画賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できる楽しい文学の集いです。創作への熱い思いを交わしましょう。どうぞご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時●平成二十四年一月二十八日(土)

授賞式午後二時/祝賀会・新年懇親会五時半

会場●東京都大田区民プラザ地下小ホール

東京都大田区下丸子三・二・三

TEL03・3750・1611

※東急・多摩川線「下丸子」駅前

会費・飲食費●授賞式無料、祝賀会一人五千円

問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮

TEL03・五七〇六・七八四七(見・五十嵐まで)

または090-8171-9771(平日)

第9回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。また埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。今年もどうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。作品をお待ちしています。

●●募集要項

募集内容●オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る(複数応募者は失格とする)。

応募資格●2012年6月30日現在において45歳以上の者

応募規定●400字詰原稿用紙50枚以内(20枚くらいでも可/原稿用紙の場合は必ずA4原稿用紙を使用。B4は失格)。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募のこと(コピーを応募するのが望ましい)。※応募審査料1000円をお願いします。

別紙に①応募部門(2012年度第9回銀華文学賞応募作品と明記)②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日(生年月日のないものは失格)⑤〒(ないものは失格)・住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記入。⑨応募審査料1000円を郵便為替(何も記入しない)で同封。外国からは12USドル。応募者には結果を通知し、希望者は作品をインターネット・ホームページに掲載する。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●銀華文学賞■賞状・トロフィー・賞金20万円(受賞者複数2名の場合は10万円、3名の場合は7万円)

河林満賞■賞状・トロフィー・賞金5万円

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円(数名)

奨励賞■賞状・賞メダル

選考委員●作家集団「塊」メンバー

締切●2012年6月30日(当日消印有効)

発表●予選通過者は2012年11月末発売の「文芸思潮」48号に発表する。受賞作品は2013年1月末発売の「文芸思潮」49号に発表掲載。優秀作・奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催●アジア文化社「文芸思潮」

※主催者から

真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。

※恐縮ですが応募審査料1000円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

銀華文学賞選考委員プロフィール

小沢美智恵

おざわ みちえ

1954 茨城県生まれ
千葉大文学部卒
93「妹たち」で川又新人賞受賞
95評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作
06「冬の陽に」で千葉文学賞受賞
日本ペンクラブ会員

大高雅博

おおたか まさひろ

1954 石川県生まれ 日大文学部卒
80「旅する前に」群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥー・リメンバー」など

都築隆広

つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ 東海大文学部卒
2002「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞
「狼を見る」(「文芸思潮」)「ハンコの町の鰻がいる家」(「三田文学」)他
月刊「望星」書評員

八賞正大

はっかく まさひろ

1952 東京生まれ
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒
教師・精神対話士
92「十二階」で新潮新人賞受賞
小説「零度の遊び」「イエロークラスター」「父のフレーム」「カウンター」ヤルポ『夜光の時計』など
教育と文学、心理学、精神分析を幅広くつなぎながら文学活動を展開

五十嵐勉

いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒
79「流瀆の島」で群像新人長編小説賞受賞
84-90タイ在住、カンボジア問題取材しながら東南アジアを遍歴「東南アジア通信」「アジアウェーブ」創刊・編集長
主著に『緑の手紙』(読売新聞インターネット文芸新人賞)・『鉄の光』(健友館文学賞) 他の小説作品に「ノンちゃん、NONGCHAN」、またルポ『微笑みの国タイ』などがある。

言葉は武器なり

六藍光洋

予期せぬことだったので、私は驚いて彼を見た。浅黒い顔に不精髭を生やし、目付きの鋭い小男だった。

「そうだが」

答えない理由はなかったもので、私は答えた。ついでに、「君はこの国から来たんだ？」

と、問い返した。

多分、今でも同じだろうが、当時のパリは東洋人の若者であふれ返っていた。金持ちになったついでにやって来た日本人、昔から住み着いている華僑の中国人、ベトナム戦争で亡命してきたベトナム人、今戦われている内戦を避けるために逃げてきたカンボジア人、それに、優雅な生活にあこがれてやって来た裕福な韓国人やタイ人……。

一九七四年 パリ

私とシムが出会ったのは、パリ東洋語学校（国立東洋言語文化学院。アジアの各言語学部がある。フランスで日本語学部を開設している数少ない大学の一つ）の立ち飲みカフェテリアであった。

横へ来た男をチラッと見てアジア人だとは認識したが、それ以上私の気持ちは動かなかった。

彼は、学生が愛読するル・モンド紙のページに目を通してから、それを傍らに置いて、私に話しかけて来た。

「君は日本人か？」

日本人と韓国人は何となく雰囲気で見別できる。だが、それ以外の国の人たちとなると、どこから来たのか見当さえも付かなかった。

「俺はカンボジア人だ。名前はシム。ソルボンヌで、シヤスガイヤ政治学をやってる」

彼はそう自分を紹介した。

私も礼儀として、ジツシユウ（一九六八年の五月革命の後、パリ大学は一〇の大学に分割された。ジツシユウは現パリ第七大学。ちなみに、ソルボンヌは現パリ第三大学である）で文学をやっているミッシヒロだ、と自己紹介を返した。カンボジア人と聞いて、私の神経は過敏に反応した。それは、当時、カンボジアが世界中から最も注目を浴びる、ホットな紛争地域だったからである。アメリカにバックアップされたロン・ノル政権と、ポル・ポト率いる共産主義勢力のクメール・ルージュとが鎗を削っていた。

私は、個人的には、クメール・ルージュのシンパだったので、余計に気を遣った。

後に、私がシムと一緒にいるところを見た別のカンボジア人から、シムはクメール・ルージュだから気を付ける、と忠告されたことがある。その彼は、ロン・ノル政府高官の息子で、戦いを逃がれてパリへ避難して来た男であった。当時、パリのカンボジア人学生は、当然、親ロン・ノル派と親クメール・ルージュ派とに分かれていた。

前者は政府要人の子弟や裕福な商人の子供たちで、政治的には組織されておらず、クメール・ルージュに対して本能的な敵意を抱いてはいるものの、本国で起こっていることには驚くほど無関心で、専らパリのデカダンスに耽溺することに忙しい連中であつた。

後者はロン・ノル政府に不満を抱き、その打倒を目指すクメール・ルージュに与する者たちであつた。

シムは、実際、どちらの人間なのだろうか？ 私が警戒したのはそれが分からなかったからである。

ところが、フランス人の友だちが、ソルボンヌ前にあるモンテニユー像の台座の上に立って、通行人に向ってクメール・ルージュへの支持を呼びかけているシムの姿を見かけた、と教えてくれた。彼は、シムは間違いなくポル・ポトに送られて来た、宣伝工作員の一人だと断言した。

「なんで、ここでそんなことをする必要があるんだい？」

「そりゃあ、国際的な支持を獲得して、アメリカとロン・ノル政権にプレッシャーをかけるためにさ」

私の無知さに呆れたように、彼は答えた。

いつしかシムとは親しく言葉を交すようになっていたのだ、それを聞いて、私はますます彼に警戒心を抱くようになった。もしかして、彼が私に近付いて来たのは、何か、政治的に利用するためにではないのか？

私が警戒しているのはシムにもわかっていたはずである。

だが、彼は、何も気付かぬ振りをして、素知らぬ顔で通していた。また、自国で起こっていることについては、一言も触れようとはしなかった。

私と彼とは、ただ、文学の話をしただけである。それは私が文学をやっていたからなのであるが、彼も、文学がとてもしらなく見えた。クメール・ルージュの若者なら、毛沢東思想に凝り固まっていたってよさそうなものだが、彼はそうした視野の狭い教条主義的な見方には全く与せず、驚くほど自由に発想を展開することができた。文学では、古典にも新しいものにも精通していて、私に舌を巻かせた。

私のシムに対する気持ちは、会う度毎に変わって行った。もし、カンボジアに生まれて政治に携わっていなければ、彼も間違いなく文学を志していただろう。そう思うと、彼への親しみは一層深まった。

ある日、シムは自分の部屋へ来ないか、と私を誘った。彼がわざわざ部屋へ呼ぶからには、何かわけがあつてのことだろう。もしかして、クメール・ルージュに協力しろ、と言つたためではないのか？ そう考えて、私は、一瞬、行くのを躊躇った。

確かに私はクメール・ルージュのシンパではあるが、カンボジアの内戦にまでコミットする積りはなかった。それ

なぜ彼がそんな部屋に住んでいたかは明白だ。偏に、賃賃料が安かつたからである。

部屋には、窓がなく、屋根に明り取りの天窓が一つあるのみ。それは空に向いているので、そこから周囲の風景は何も見えない。

三角形をした一方の壁に蛇口と洗面台があつた。

それらは、まだ良いとしよう。私が最も驚いたのは、彼の持ち物の少なさであつた。

部屋の中央の床に直に敷かれたマット、その上に乗つた汚れた掛け布団と枕、枕元だけを照らすのがやつとの小さなランプ、その横に積まれた五、六冊の本（みんな図書館のラベルが貼つてあつた）、部屋の隅に置かれた粗悪なカーバスの旅行鞆、それと並んで履き古されたブーツが一足……、それで全てなのである。

部屋へは入つてはみたものの、私はどこへ身を落ち着けたりいいのかもわからず、まごまごしていた。

それに気づいたシムは掛け布団を押しつけて、マットの上へ座るように促した。そうしておいてから、洗面台へ行き、蛇口を捻つてコップに水を汲んできて、私の前へ置いた。お茶代わりの積りらしい。

それから、自分は枕を取つてクッション代わりに床へ敷き、その上に胡坐をかいて、私と向き合つた。

あまりにも粗末な状況での歓迎に、驚くよりも呆れて、

なら、もしシムがそれを求めたら、はつきりノーと言えよ。それ以上は、彼も、外人である私に強要したりはしないだろう。私は彼の誘いを受けることにした。

それには、次のような理由があつたからだ。

第一に、これまでの友情を反故にしたくなかつたこと。

第二に、もし彼がカンボジアの内戦に触れるならば、当事者の口から詳しい事情を聞けると思つたこと。

第三に——そしてこれが最も大きな理由だつたのだが、彼が読んでいる本の多さから、彼の部屋には、きつと、それらの本が溢れているに違いないと想像したこと。——私は本に弱かつた。

シムは、パリで最も古いマレー地区の屋根裏部屋に住んでいた。

磨り減つた木の階段を上り詰めて、彼が開けたドアの間から中を覗いた私は、思わず後ずさりしそうになつた。それは、部屋と言うよりも、穴倉と言うのがふさわしかったからである。

屋根裏部屋というのは直方体を斜めに切つているので、屋根の勾配が部屋の空間に影響を与える。一般には、台形を横に倒した形になるのだが、彼の部屋は屋根の勾配の端が床にまで着いていたので、正三角形をしていた。そのため、ちゃんと立つていられるスペースは、壁際の三分の一ほどしかなかった。

私は誘いを断らなかつたことを後悔した。

「ここが俺の王国さ。居心地はどうだい？」

彼は卑下するところなく尋ねた。

「まあまあだ。良くもなく、悪くもない」

それが、私の譲歩して言い得た、最大の世辞だつた。

「そんならよかつた。わざわざお出ましいただい甲斐があつたつてもんだ。これで、俺がどんな人間か、わかつて貰えただろうか？」

彼は自分のありのままの姿をみてもらいたくて、私を呼んだのだつた。

「ああ、わかつたとも。君は好い奴だ。本当に好い奴だ」

その実直さから、彼が信頼に足る人間であることを、私は直感した。そうなれば、クメール・ルージュであろうとなかろうと、そんなことはどうでもよかつた。人にはそれよりもっと大切なものがあり、彼は、正しく、それを体現している人間の一人だと思えたからである。

私は、初めにした後悔を、後悔した。

ところで、私がここへ来てからずっと気になつていたものがある。それは、斜めの天井に張りつけられた、一メートルほどの長さの横断幕のようなものであつた。

そこには、*«Le mot est une arme.»*（言葉は武器なり）と書かれてあつた。

「何だい、こりゃ？」

私はそれを指して尋ねた。

「自分に負けないために俺が書いたんだ」

それを聴いて、私は驚いた。いつも泰然自若として、自信に溢れ、動じるところが微塵もない彼が、自分に負けるだなんて！

「俺は人一倍弱い人間だから、すぐ、挫けそうになる。だから、そのときに負けそうな自分にブレーキをかけてくれる何かが必要だったんだ」

「でも、これって、どう言う意味なんだい？」

「意味なんか何だっつていいんだ。君が好きないように解釈してくれりゃさ」

彼は照れるように言った。

私は、そのとき、シムがなぜ完璧なフランス語を喋るのかを、やっと理解できた。

フランス語は発音が難しいので、外国人が母国語でないフランス語をしゃべるときには、みんな母国語のアクセントを残してしまっている。カンボジア人だと小鳥が囀るように、鼻にかかった舌足らずな音になる。

ところが、彼のフランス語は母国人がしゃべるみたいで、非の打ち所がなかった。私はそのことをずっと不思議に思っていた。

だが、今、ようやくその謎が解けた。自分たちへの支持

権が倒れて、三派に分かれた勢力が内戦を戦った。そして、パリ和平協定が整い、カンボジアは民主主義国への第一歩を踏み出すことになった。

日本政府は、この機に、復興援助計画をいくつか用意した。その一つがプノンペン港の改修計画であった。

カンボジアには、主要な港は二つしかない。一つは河川港のプノンペン港、もう一つは海港のシアヌークビル港。

取り扱う貨物量は、前者が圧倒的に多い（もともと、最近はその立場が逆転しつつある、と聞くが）。

プノンペン港は、メコン河とトンレサップ河の合流点近く、トンレサップ河に面してある。ちょうど、王宮の前辺りの位置である。

船は、南シナ海から、メコン河をさかのぼってやって来る。ただし、メコン河は大海のように深くないので、大型船は入って来れない。それでも、この港は外国との貿易で、第一の役割を担っていた。

この港を建設したのは、かつての植民地支配者であるフランス人たちであった。それ以来、一度も、大々的な改修が行われたことがなかったので、設備は旧式で、しかも老朽化が進んでいた。我々が出かけたときには、五本ある浮き桟橋のうち、二本が壊れて、使用不能になっていた。我々の援助計画は、桟橋を直し、装備を一新し、稼働率をアップさせる、というものであった。

を訴えるのに、フランス人並みの言葉を喋る必要があったので、彼は死に物狂いで発音のハンディーを克服して来ていたのだ。完璧なフランス語でなければ、せっかちなフランス人は傾ける耳を持たないからである。

だが、フランス語をやっている自分だからこそ言えるのだが、それが、いかに厳しい練習を要するものであるかは、口を酸っぱくして説明しても、やったことのない人にはわかってもらえないだろう。彼の完璧なフランス語はその成果だったのだ。つまり、彼はフランス語を戦う自分の武器に仕立てていたので。

それからほどなくして、例のフランス人の友だちが、バリからクメール・ルージュの学生は全部姿を消してしまっただと教えてくれた。彼の憶測では、クメール・ルージュが戦闘で優位に立ったので、本国へ呼び戻されたのだろう、ということだった。

その後で、プノンペンが陥落したというニュースが流れた。

一九九二年 プノンペン

私は、カンボジアの首都、プノンペンに来ていた。

一〇〇万人とも言われる無辜の民を殺したボル・ポト政

私は通訳として、その計画に加わるよう求められた。

このオファーが舞い込んだとき、私は小躍りして喜んだ。真っ先に、シムのことが頭に浮んだからである。

シムは、何も告げずに（秘密にする政治的な理由があったのだろう）、パリから忽然と姿を消したまま、何の消息もなかった。フランス人の友人からは、他のカンボジア人学生と共に、ボル・ポトに呼び返されたのだ、と聞かされた。ところが、母国で彼らを待っていた運命は、想像を絶する悲劇的なものだった。彼らの大半は、帰国するとすぐに肅清されてしまったという。

ボル・ポトは、外敵以上に身内の知識人たちを敵視していたのである。彼は教養ある人間を、片端から抹殺して行った。中には、眼鏡をかけているというだけで知識人と見なされて、殺害された人もいたらしい。

ボル・ポトは、また、書物や、芸術作品や、文化財まで反動的として破壊した。その行動は、彼がいかに狂人的な知的コンプレックスの持ち主であったかを、如実に物語っている。おそらく、彼の頭脳は、偏頗な毛沢東思想を受け容れる余裕しか持ち合わせていなかったのだろう。そして、そこに自分の身勝手な解釈を加えて、冷酷な大量虐殺の蛮行に及んだものと思われる。

しかも、その結果は、この国にとっては途方もない大き

な損失をもたらした。有能で価値ある人材が、際限もなく失われてしまったからである。

私をブノンベン港改修計画に喜んで参加させたのは、シムを探し当てられるかも知れないという、一縷の望みであった。もし、彼が生きているのなら、ぜひ再会したい。殺されてしまったのなら、どこでどのように死んだのか、それを知りたい。私にとって、それは彼の骨を拾うのと同じ意味がある。また、彼と結んだ友情へ、誠実に向き合うことでもあった。

ホテルへ着くと、私はスーツケースも開かず、すぐ街へ飛び出した。通りに出れば、そこでシムが待っていてくれるみたいな気がしたからである。だが、もちろん、そんなことはあるはずがなかった。

ただ、この街は一目で私を魅了した。
 ポル・ポトの支配下で四年間、人が住まぬまま放置されていたというのに、ブノンペンは大して荒れた様子もなく、相変わらず『東洋のベニス』と呼ばれる美しい景観を保っていた。

それに、何といってもここはアジア。建物も、人も、同じアジア人の私の気持ち逆なでするようなものは一つもなかった。

で一緒に学生をしていた親友なのだが……。

だが、誰一人として彼のことを知る者はいなかったし、興味を示す者さえいなかった。彼らには、そんな知らない誰かにかまけているより先に、自分自身、身内、さらには友人や知人たちといった、真っ先にかかわらなければならぬ者たちがたくさんいたからである。それらの者たちがポル・ポトによってどんな酷い目に遭わされたか！ その悲惨な運命を、誰かに聞いてもらいたくうずうずしていたのだ。

誰もが先を争って、自分が受けた虐待や、見聞きした惨劇を語りだした。初めのうちは嘆息しながらいちいち聞いていた私だったが、慣れると、彼らの話にはいくつもの類型があることに気付いた。

ポル・ポトは少年兵の育成に努めた。彼らは純粋で洗脳し易く、忠実な部下にすることができたからである。彼らはポル・ポトを神のように崇め、彼の命ずるままに動いた。彼らの任務は、身内や周囲の者たちの中にいる反ポル・ポト分子を見つけ出して、処刑することであった。

彼らは何をしたのかを、私は、対話者の証言から具体的に知ることができた。

——勇気を付けるために、自分が殺した相手の生き胆を取り出して食べた。

——強制労働に向かない老人や病人を、鍬の頭で殴って殺

ただ、日本からやって来た私の目には、まだ回復されていない社会秩序が歴然と映し出された。日本にも、戦後、闇市時代と呼ばれる混乱した時期があったが、この街が醸し出す空気もそれと変わりがなかった。

ただ、救いだつたのは、あれほど酷い目に遭わされ、心をずたずたに引き裂かれているはずの人々の表情が、どれも底抜けに明るく、笑いに満ち溢れていたことである。私は、心の重荷が降りたみたいに、ホッと息を吐くことができた。

街には車はまだそれほど多くはなく、交通の主役は日本製の中古バイクで、まるで群がって飛ぶ蠅のように、排気ガスを撒き散らしながら我が物顔に走り回っていた。

我々は、ブノンベン港の改修で、日本が供与できるものについて、カンボジア側と話し合いを始めた。当然のことながら、何もない彼らは何から何まで欲しがった。しかし、我々の方にも決められた予算枠があるので、一〇〇パーセント彼らの要望に応じるわけにはいかない。そこで、必要性が高いものの順に並べて、供与するものを決めていった。この協議は、まず先方の運輸省の役人で行ない、次に現場の人間である港湾局の責任者で行なった。

それらの協議の合間に、私はそこに出席した人たちに、それとなく、シムの消息を知らないか、問うて見た。パリ

した。

——妊婦の腹を割いて胎児をつかみ出し、それを鞠遊びでもするかのようになり、空中に放り上げて下から刀で突き刺した。

——反抗した者を木に縛り付けて、形が分からなくなるまで棍棒で殴打した。

——反ポル・ポト分子の密告を拒んだ者の舌を引き出して、焼き串を突き刺した。

——ブノンペンから移動させられた人たちを、水路作りの強制労働に駆り立て、朝から晩まで休みなく働かせた。与えた一日の食料は米一掴みだけ。強制労働に耐えられずに倒れた者は、その場で生き埋めにされた。

——強制労働の邪魔になる幼子は、母親の手から引き離され、彼女の目の前でナイフや刀で刺し殺された……。

少年兵たちは、まるで捕まえた昆虫の羽や脚をむしって遊ぶ無邪気な子供のように、笑いさざめきながら、それらの残虐行為を繰り返した、という。

「見てくれ、あいつらの作業だ！」

突然、港湾局長は着ていたポロシャツを脱ぐと、裸の背中をこっちに向けた。そこには、刃物で抉られた、生々しい傷跡が残っていた。

すると、その場にいた他の者たちも、一斉にシャツをはだけたり脱いだりして、体に刻み込まれた無数の傷跡を見

せた。

話を聞かされただけなら、ボル・ポトの側に立って、その証言には誇張や捏造があると反論することができただろうが、こうして動かぬ証拠を突きつけられると、全面的に信じる以外にはなかった。

ブロンペンを出て小半時ほど走ったとき、運転手は、背丈ほどの雑草が生い茂った草原の真ん中で車を停めた。

その奥に、有刺鉄線で囲まれた、草のない一面があった。足を踏み入れると、目の前には、縁が三、四メートル、深さが一メートルほどの、方形をしたおびただしい数の穴が口を開けていた。中を覗くと、黒い布切れや、女性の頭髮や、拾い残された骨の破片などが散らばっているのが目に付いた。『5』という番号を振った説明板には、『ほとんどが衣服をまとっていない、一〇〇人以上の女性と子供の犠牲者が一緒に埋められていた墓』と記されてあった。

クメール・ルージュが惨殺した人々を一まとめにして埋めた場所に、私は立っていたのだ。側には死体の養分を思い切り吸って異常に成長したバナナの木群が、嬉しそうに、風に葉をバタつかせている。その音に私は胸糞が悪くなつて、吐き気を催した。

そこからほど遠くないところに、犠牲者のための慰霊塔があると運転手が言うので、連れて行ってもらった。

かして、彼の頭蓋骨もその中に混じっているのではなからうか？ 私は目を皿のようにして、一つ一つ、丹念に見ていった。しかし、彼のものと識別できる骨は、ついに見つけることができなかった。

「*Sin. ou est-tu ?* (シム。どこにいるんだ?)」

私はそっと呼んで見た。

答える者はなく、ただ、咽せ返るように暑くなった草原の上を吹き抜ける風が、空しく周りの空気を震わせているばかりであった。

予定の滞在期間が終わりに近づいているのに、シムの手がかりはまだ何もつかめていなかった。

私が焦っているのを見て、毎日会って協議をしている港湾局次長が、ツールスレン刑務所へ行って見るといい、と教えてくれた。

この刑務所は、今は『虐殺博物館』として公開されているらしい。ここで処刑された人の数は二五〇〇〇人に上ると言われている。ボル・ポトは生粋のサディストであったらしく、処刑する全ての人間の顔写真を撮って保存させていた。博物館になってから、その写真が貼り出されているので、もしシムがそこで処刑されたのなら、彼の写真も残っているはずだ、と。

滞在最後の休日に、私はツールスレンの元刑務所へ出か

車から降りると、目の前に、白亜の四角い塔状の建物があつた。屋根は、この国の寺院建築がどれもそうであるように、四方に向かって張り出した正三角形の破風を備え、その上の洋ベルを伏せたような台座の上に、錐のような尖塔が天に向かって伸びていた。

塔は四方の壁がガラス張りで、その中を覗いた私は、一瞬、恐怖ですくみ上がった。中は屋根の真下まで棚が作られ、各棚にはおびただしい数の頭蓋骨が、無造作に、重なり合つて並べられていたからである。キリング・ヒルの犠牲者たちのものであることは、疑うまでもなかった。ボル・ポトの失脚後、さつき見たような集団墓地から掘り出されたものを、洗つて、ここへ持ってきて並べ積んだのだろう。骸骨は、一様に無表情で、何かを待つようにじっと上空を見上げていた。

しかし、一体、何を待っているというのだろうか？ 何も！

それらは、ただ、そこにそうしてあるだけであつた。その無表情さが、生と死の境をはつきりと画していた。全てが終わり、彼らの上に、笑いや涙が再び戻ることはない。

そのとき、運転手が目を潤ませながら、そつと、私に囁いた。この中には、自分の両親と兄が混じっているかも知れない、と。

私はといえば、ずつと、シムのことを考えていた。もし行て行つた。

それは、ブロンペン市内にある。それもそのはず、ボル・ポトが刑務所にする前は、リセ（高等学校）だったのだ。コンクリートの三階建てで、その区域の佇まいとはマッチしない、新しい建物だった。周囲には囚人が逃げ出せないように、高圧電流を流す有刺鉄線が張り巡らされていた。入り口のホールに一歩足を踏み入れたとたん、私は戦慄に見舞われて立ち尽くした。正面の壁に私を迎えたのは、犠牲者の頭骸骨を整然と並べて作ったカンボジアの地図だったからである。

私がそこに見たのは、骨になつてしまった人たちに代わつて、ボル・ポトの悪行を糾弾する、生き残つた人たちの激しい怒りだった。

大広間には、ボル・ポト一味が囚人たちを拷問するのに使つた道具が展示されていた。その種類の多さと想像力の逞しさに私は驚嘆した。他者を苦しめるために、これほどまでの情熱を傾けられることが、私にはとても理解できなかった。人間が為す悪行は底が知れず、おぞましい限りだ。脇にはそれがどのように使われたか、絵入りの説明がなされていた。その、残酷さに私は眩暈を覚えて、思わず側のベンチへ座り込んだ。

だが、よく見るとそれらの絵で拷問を受けている人たちは、まるで、そうされるのが当たり前と言わんばかりに、

全く苦痛の色を見せていないのだ。肉体的な苦痛に弱い私には、それがひどくショックだった。

それは、画家の腕が拙いからなのだろうか、説明目的を優先させてリアリティーは二の次にしているからなのだろうか、それとも、囚人がすっかり生きる希望を諦めて苦しむ感覚さえ失ってしまったからなのだろうか？ もし最後の理由だとしたら、人間から、その固有の権利である苦しむことさえ奪ってしまったボル・ポトの残忍さは、まさしく人類の敵にふさわしい。

次に、私は大して広くない部屋に入った。中にはただ一つ、マットを取り払った、鉄製の錆びたベッドが置かれているだけで、がらんとしていた。ただ、ベッドも床も壁も、一面に黒ずんだ汚れが染み付いていた。私が、それを血の跡であることに気付くまでに、時間はかからなかった。このベッドでも、また、死に至る拷問がなされていたのである。壁にはモノクロームの大きな写真が貼られていた。その写真の被写体は、目の前のベッドに両手両足を縛り付けられて、仰向けに寝かされた裸の男だった。その体は、まるで空気を一杯吹き込まれた太いタイヤのチューブのように、パンパンに膨れ上がっていた。死後腐敗が進んで、体内にガスがたまっていたせいなのだろう。

プノンペンが陥落したとき、ボル・ポトの一味は逃げるのに忙しくて、拷問中のその男性を放置した。そして、刑

いるのはこの部屋だった。

写真は手札サイズほどで、奥の壁一面に貼られていた。この刑務所で処刑された二五〇〇〇人分と他所から持って来たものとを合わせると、壁一面では貼り切れず、横の壁にまではみ出していた。

どの写真も、几帳面に正面を向いて撮られていた。しかし、どの顔からも表情が消えてしまっていて、まるでマスクのようであった。

壁の前には、いく組みかのカンボジア人たちも来ていた。おそらく、ボル・ポトの迫害を逃れて、幸運にも生き残れた人たちなのだろう。行方不明になった肉親の消息を求めてやって来て、ついに彼らの写真と対面し、その場に泣き崩れる者もいた。

これがシムの消息を知る最後のチャンスになるかも知れない。そう思っただけは意を決し、膨大な数の写真に立ち向かって、一枚一枚丹念に見ていった。

ところが、部屋の照明が悪かったのと、白黒写真の焼き付け濃度がまちまちだったのとで、私の目はすぐに疲れてきた。それに、十分な換気が行き届いていない部屋の中は、むせ返るような暑さだった。そのせいで、私の注意力は次第に散漫になり、ついには機械的に目を滑らせているだけになってしまっていた。

最初の壁をほぼ見終わっても、まだシムは現れなかった。

務所が開放されたときに撮られた写真の主は、息絶えて、そんな恐ろしい姿になってしまっていたのである。

この写真は、悪夢のように、いつまでも私の心に絡まりついて、容易に離れようとはしなかった。

続いて私が見た光景も、特異なものだった。部屋と部屋とを仕切っている壁の中央が次々と戸一枚大にぶち抜かれ、それが奥まで続いていた。それは、隣の部屋と行き来する通路にするために開けられたものであった。

その通路の両側には、レンガを積み上げた無数の個室が作られていた。広さは畳一畳ほどで、戸がついておらず、通路から中が丸見えだった。床近くの壁からは太い鉄の鎖が垂れ下がっていた。

独房だった。囚人たちはその中で鎖に繋がれ、自分の処刑の順番が回って来るまで、じっと待っていたのである。

そのとき、彼らがどんな気持ちであったかは、当事者でない私が、勝手な感傷を交えて想像するのは控えよう。ただ、彼らに代わって、その扱いがいかに理不尽なものであったかだけを、叫びたい。しかも、それを強要したのが、同じ血を分けた同胞であったという事実は、あまりにも惨すぎはしないだろうか。

私は最後の部屋へやって来た。今は机も椅子も取り払われてしまっているが、元は教室の一つだったようだ。先日、港湾局長が言った、犠牲者の顔写真が貼り出されてこの分だと、彼がいる可能性は極めて低い。私は半ば諦めかけていた。

ところが、一服して、隣の壁へ移った瞬間、私はそこで釘付けになった。

ああ、やっぱり、ここに……。

見覚えのあるシムが、最上段から私をじっと見下ろしていた。

十分覚悟はしていたとはいえ、実際に彼の死の証拠を突き付けられると、私はやはり動転してしまった。頭の中は真っ白になり、その場で何を考えたのか、今でも思い出すことができない。おそらく、際限のない喪失感に襲われたものと思われる。

私はいたたまれなくなって博物館を逃げ出した。脳裏に毅然とした表情のシムを焼き付けたままで。

要するに、シムたちバリのクメール・ルーージュのグループは、体よくボル・ポトに利用され、自分の権力の邪魔になつたときに処分されてしまったのだ。

ボル・ポトのために、いや、カンボジアのために、と信じて掲げていた『言葉は武器なり』というシムの信念は、何かの役に立ったのだろうか？ その疑問がいつまでも私を苦しめた。その、武器であるはずの『言葉』をもってしても、彼は自分一人の命を守ることさえできなかったではないか！ そんな他愛のないものだったのなら……。

「いや、ちょっと待ってくれ、ミツヒロ。人には命よりもっと大切なものがあるってことを、君も知ってるはずじゃないか。それは信念だよ。自分が信じるものに殉ずることが究極の生き方だ、ってことをさ」

写真になったシムが、静かに、私にそう論しているように思われた。

私の通訳のミッシェンは、明日、プノンペン港改修計画の合意書に、双方の代表がサインをすれば、それで終わる。その後は、午後の便で帰国するだけだ。

私は放心状態でホテル・カンボジアーナのロビーの椅子に座っていた。ツールスレン刑務所でシムの写真を見た瞬間から、私の胸にはポツカリと空洞が開いてしまった。そして、これまでカンボジアへ寄せていた熱い思いは、そこからみんな漏れ出して行って、残ったのは空虚さだけだった。

何もかもが終わりだ！

私は心の中で、執拗にそう繰り返していた。

ホテル・カンボジアーナは、この国の最高級ホテルで、泊まっている客はみな金のある外国人ばかり、アメリカ連駐軍の将校で占められていたかつての帝国ホテルみたいにある。国連代表の明石康も、ここを宿舎にしていた。我々が泊まっていた時期に、フランスのミッテラン大統領

領がやって来た。三派のバリ和平協定をプロモートしたフ

ランスの主の訪問は、その後の和平の進捗状況を検分するため、という触れ込みであったが、本音は、カンボジア復興援助を口実に、フランス企業の進出の可能性を探るのが目的だった。そのために、彼は閣僚や、財界人や、企業の代表を三〇〇人ほども随行させていた。ミッテラン自身はこのホテルに投宿しているかどうか不明だったが、その他の連中はみんなこのホテルに泊まっていた、そのため、ロビーは、さながら、にわかにはフランスの植民地が出現したような景観を呈していた。

彼らはどうだるような暑さの中で、ダークスーツに身を包み、アタッシュケースを提げて、足早に行ったり来たりした。あるいはロビーの一角にかたままって、仕入れて来たばかりの情報を声高に交換し合っていた。

その姿を見ていると、私は、水に落ちた獲物にしぶきを上げて群がって来る南米の食肉魚を想起してゾットとなった。彼らは新生カンボジアに群がる、この魚ではないか？

いや、いや、食肉魚は何もフランス人に限ったことではない。我々日本人も、また、別の食肉魚であった。実を言えば、我々の経済援助も、その真の目的は、援助を口実にこの国への経済進出を図るための橋頭堡を築くことにあるのだ。

そして、それこそが、どの国の海外援助にも付いている、

られないお前たちは……」

だが、そのとき、私の怒りは急に勢いを失った。それは、ロビーにいる一人の人物に、目が止まったからである。

その人はダークスーツに身を包んで肩で風切るフランス人のビジネスマンとも、私の同胞の、いつも上目線で人を見る外務省の役人とも異なる種類の人間だった。

それは、一目で農民と分かる、四〇代の婦人だった。こんな最高級ホテルにいるのは相応しくない。それもそのはず、彼女がそこにいたのは、もちろん、泊まり客としてではなく、床を磨く掃除婦としてであった。彼女は顔を汗で光らせ、一所懸命、モップで床を擦っていた。

彼女は、振り向かれることはなく、誰からも無視されていた。だが、そんなことはどうだっていい。重要なのは、

「まほろば賞」特別賞

小説集

繭の中

森崎房枝

アジア文化社

銀華文学賞優秀賞「爪痕」「ガラス」収録

1400円 (税別)

彼女がボル・ポトの圧政下を生きのびたことと、この先どんな状況になろうと、また生きのびるだろうということなのだ。彼女は、まさに生きることにいそしむ人間の姿そのものだった。彼女はその逞しい生命力のオーラで包み込んで、萎えかけていた私の気持ちを蘇らせてくれた。彼女を見たお陰で、私の心は次第に落ち着きを取り戻していった。同時に、私は、彼女の上にシムを重ねて見てもいた。もちろん、彼と彼女は一八〇度以上も違う人間である。それなのに、文学を語るときに彼が見せたあの純朴な表情を、私は目の前にいる婦人に垣間見ることができた。それが何であるかを言うのは難しい。だが、それを承知であえて言うなら、農民性ということ以外に、ふさわしい言葉を見つけないことができる。

私も農民の出だから、それを共感できるのだ。農民とは、容赦のない自然に立ち向かって一歩も退かず、決して挫けることのない頑固さをもつて、あらゆる困難を乗り越えて行く者たちである。だから、『言葉は武器なり』というシムのレトリックの底には、困難に立ち向かってゆるがない、農民の固い信念が込められているように思われる。そして、その信念こそが、ロン・ノルの傀儡政権を倒し、ボル・ポトの独裁を打ち砕き、最後に民主主義の実現へと引っ張っていった、カンボジア農民の原動力であったのではなからうか？

受賞の言葉

六藍光洋

《新訳聖書ヨハネ福音書——太初に言あり、言は神と偕とともにあり、言は神なりき》

ゲーテの『ファウスト』の中にある「初めに言葉ありき」という一節に、次のような注釈がついています。

『言葉（ロゴス）は不滅の本体である。ギリシヤ人はそれを理性の声と考えたし、ユダヤ人はそれを神の自意識と解釈した。世界はロゴスによって成立し、ロゴスによって統べられている』（筑摩書房、世界文学大系）

言葉が武器になりうるのは、それがロゴス（理性）だからだ、と私は考えました。そこから、この作品の構想、パリやブロンペンが湧いてきました。ただし、その言葉は、ツイッターで囁かれるものや、テレビでお笑い芸人が発するものとは一線を画しておきたいと思います。

この拙文は他のコンクールにも応募しましたが、一顧だにされませんでした（今回読み返して見て、その理由がよくわかりました。あまりにも雑すぎます）。ですから、最終審査に残ただけでも、十分でした。

それが、この賞を戴けたのは、審査に当たられた先生方が、『言葉』をテーマにしたかった私の意図を、ちゃんとお汲み取り下さったお蔭だと信じております。

誠に、ふさわしい審査員にめぐり会えて、私にとってはこの上もなくラッキーでした。心より感謝申し上げます。

——ところで、シムよ、人間、死んじまえばお終いだな。いくらしたいことがあったって、何もできやしない。だから、君は死ぬべきじゃなかったんだ。ずる賢く立ち回ってでも、生き残るべきだったんだ。そうすりゃ、君の言葉の武器は、もっと、もっと有効に使えただろうにさ。今となくちゃ、もう何を言っても詮ないことだが……。

だが、俺はまだ生きてる。もう二度と再び、こんな惨いことが世界のどこでも起こらないように、これからは君に代わって、俺が『言葉は武器なり』を担いで行くよ。だってこれは、人々が平和に暮らせる世の中を実現することに命を賭けた、君の遺志なんだからなあ。誰かが受け継がなきゃならないんだ。

だから、君はいつまでも俺の心のどこかにいて、心安らかに見守ってくれてりゃいい。なに、気を遣うことなんかないさ。俺たちは友だちなんだから？ だったら、そうするのは当たり前のことじゃないか。

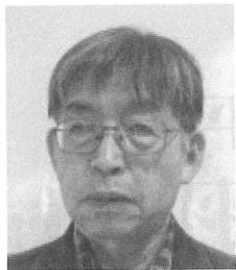
私は、ようやく、心穏やかにカンボジアを離れられそうな気持ちになっていた。

六藍光洋

ろくあい こうよう

兵庫県生まれ
大阪大学文学部卒業
渡仏（1971-1980）
フリーランス通訳

ODA（政府開発援助）通訳として、西アフリカで業務に従事
2009「砂漠」で第5回「文芸思潮」エッセイ賞奨励賞受賞
2010「オアシスのリハビリ」で第6回「文芸思潮」エッセイ賞社会批評賞受賞
2011「暁に祈る」で第7回「文芸思潮」エッセイ賞奨励賞受賞



蓋

丹羽加奈子

にげる、にげる、にげる、にげる、にげる、逃げていく。今日も一つ逃げていく。何が逃げていくのかわからない。でも確かに何か逃げていった。

達郎は公園のベンチに腰を下ろして帽子を取った。微かに風が頭上をかすめていく。ふーっと深呼吸をして両手で頭を抱え「ふたがない」と呟く。

ふたがない、ふたがない、ふたがない、ふたがない、蓋がない。

降り注ぐ蝉時雨が達郎の口真似をして「ふたがない」と鳴き騒いでいるように聞こえる。否、にげる、にげる、にげる、にげる、にげる、逃げていくと鳴いているのかもしれない。

アコンの音が耳障りな音を立てて稼動している。達郎は一人で、工程表をチェックしていたが席を立った。そして入り口の柵に置かれていたヘルメットを被り、扉を開けた。熱風が体に纏い付く。雨期に入ったのに、今日も地表の湿度を下げるシャワーの訪れはなさそうだ。この辺りの人はスコールではなく、シャワーと言う。タイに来てから一週間過ぎていたが、まだ一度も雨が降っていない。去年の頃ははどうだったのだろう、思い出せない。この国でのプラント建設に最初携わってから十五年が経っていた。その間に中近東やインドネシア、シンガポールと暑い国での仕事ばかりが続き、通算するとタイでの生活は八年以上になる。

事務所とプラント建設用地の間にはアスファルトの道路があり、周りには夾竹桃や熱帯の樹木が緩衝地帯の役割をしている。花や花樹の名前に疎かったが、夾竹桃は自宅の前の公園に何本か植えられているので、妻から教えられて知っていた。花樹の中でとりわけ、仄かに香る白い花が好きだったが名前は知らない。現場から戻り、夕闇にこの花を目にすると、強張った体から無駄な力が抜けていく。

前方からタイ人の作業員が列を成すわけでもなく、ただらと引き上げてくる。同じ敷地内で工事をしている日本企業が雇い入れている作業員達だった。この国での作業は日本では考えられないくらい効率が悪い。その分、作業員の

朝夕、ゆっくりと散歩をしている。三十分程歩くだけで動悸が激しくなる時がある。五十八歳になって初めて経験する肉体の異変だった。それも、三カ月前までは想像し得なかったことだ。蓋を失ってから毎日襲われる肉体の不安と焦燥感、リハビリのつもりで始めた散歩も自信回復に繋がらない。

学生時代は陸上部に籍を置き、入社してからはラグビーで汗を流した身体に鬆が入ったようだと達郎は思った。

三カ月前のタイも暑かった。

事務所の時計を見た。七時を過ぎていた。つい先程、タイ人の女性事務員が帰って行った事務所には、何台ものエ

人数で補う。一日二〇〇パーツ程度の賃金である。現在、一バーツ日本円で三円のレートだが、十五年前は一バーツ四円台であった。この国もバーツの暴落で一時期経済の混乱があった。

作業員は皆穏やかで日本人にも好意的である。中近東で仕事をした時は、インドやバングラデッシュの出稼ぎ労働者の猛々しさに苦慮した苦い思いを達郎は忘れていない。

誰もいなくなった現場の点検は欠かせない日課の一つである。所長の達郎がしなくても担当者が行うことになっているが、今日は夕方から三人のスタッフ、別の現場の応援に出掛けていった。一人で現場を歩きながら一日の仕事量を確認する。自分で確かめられると安心できる。つくづく小心者だと自分の性格が疎ましくなるが、誰も達郎のことを正しく認識していないので辛い。

事務所に戻るとタイ人の運転手が待っていた。帰りは遅くなるのかと聞いた。達郎はすぐに支度をするからと答えると、運転手は車で待つと言って出ていった。

今夜の食事は一人だった。シラチャの町は日本人が多い。二千人もの日本人が働いているので、日本食にも困らない。ただ、ほとんど居酒屋だから、達郎のように飲酒の習慣がない者には居心地が良くなかった。

夕食を終えて店を出た。道路の反対側で、手を挙げた運転手を確認して……達郎は歩き出したところで、意識が遠

のいていった。

ふたがない、ふたがない、ふたがない、ふたがない、蓋がない。

達郎は蟬時雨の降り注ぐ中で、また「ふたがない」と唇を動かした。そして「逃げるな」と声を出した。目を閉じて頭を抱え、背中を丸める。頭の中のファイルがバラバラになっている。三カ月前のことが確認のないままに記憶されようとしている。拒絶したくても頭の真ん中に収まろうとしている事実がある。

頭蓋骨がない。達郎の頭蓋骨の一部がなくなった。

三カ月前、出張先のタイでの出来事が、周りの人の証言によって確かな形になり、穴の開いた頭蓋骨から脳に滑り込もうとしている。

交通事故に遭ったのだった。達郎の記憶はそこで途切れてしまった。

オートバイと接触し、転倒したことも、頭蓋骨の一部を切除して脳内出血の処置手術をしたことも憶えていない。

妻の奈津子が日本から駆けつけてくれたのは、手術が終わってから、どれくらい経っていたのかもわからない。集中治療室で五日間、混濁した意識の中で奈津子が達郎の手をしっかりと握っていたという記憶は、自分で確かめられたいという自信もなく、会社の誰かが教えてくれたのかも判

別できないでいる。事故をしたという事実が欠落している、事故の前後が上手く繋がらない。この三ヶ月の間に、積み重ねてきた仕事上の経験や奈津子との思い出も、穴の開いた頭蓋骨から逃げていく。

毎日、何かが逃げていく。

達郎は毎日、何かが逃げていく不安に駆られる。そして、今ではすっかり記憶の彼方に押しやっていた思い出したくない出来事が、穴の開いたところから滑り込み、頭の中に居座ろうとしているような気がする。それが、どのようなかわからなくて、苛立ちを押さえられずにいた。

朝夕の散歩の時間に公園のベンチで一休みしながら、奈津子や同僚の話してくれたことを反芻することで、曖昧な記憶を確定してファイリングする。

タイでの入院が一カ月、ホテルではないがサービスパートという長期滞在型アパートから通院し、リハビリの生活が一カ月続いた後に帰国した。海外出張ばかりしてきた達郎にとって妻と二人だけで、四六時中一緒に過ごせた貴重な日々だった。

一つ年上の奈津子と結婚してから十八年になる。達郎は四十で初婚、奈津子は夫に死に別れてから十年が経ち、子供も三人いた。長男は大学生になっていた。父親になるという自信はなかったが、友達感覚なら三人の子供とも上手くやっていける気がした。けれども、次男の登校拒否や家

ていた。

「遅かったわね、どこかで倒れているのかと思った」

「ベンチで休んでいた、少し歩くだけで……疲れる。それに……」と、言いかけて達郎は口を噤んだ。穴のことは奈津子には黙っておくことにした。

「無理しないで、手術をするまでは気をつけてね」

手にしたタオルを達郎に渡して、奈津子は一足先に家の中に入った。

ふたがない、ふたがない。念仏を唱えるように繰り返しながら足下に目を落としたり。
蟻が穴から出たり入ったりしている。
達郎は慌ててベンチから立ち上がり、這いつくばるようにして、蟻の穴に手を置いた。そして、その穴に土を詰め込んだ。穴は塞がなくてはいけない。どんな小さな穴でも塞がなくては駄目なんだ。どうして、今まで気がつかなかったのだろうか。毎日、散歩に出掛けていたのに、気がつかなかった自分が迂闊だった。
蟻の穴を塞がなくてはいけない。蟻だけでは駄目だ、虫の穴にも土を詰めてみよう。樹木の穴も塞がなくてはいけないのだ。達郎は憑かれたように穴を探し、それを塞ぐ。塞がなくては逃げていく……達郎の記憶のように逃げていく。

達郎は重い足取りで帰宅すると、奈津子が家の前に立つ

「ビールを飲んでみる？」奈津子が缶ビールを手に首を傾けて笑った。

少し間をおいてから「やめとく」と達郎は答えて冷たい麦茶を飲みほし、枝豆に手を伸ばす。

缶ビール一本ぐらい大丈夫だから、飲めばいいのにと奈津子がもう一度缶ビールを手にして笑う。散歩して汗を流し、風呂上がりのビールは旨いだらうと思ひながら、達郎はもう一度「やめとく」と言った。帰国してから、まだ、アルコールを口にしたことがない。冷蔵庫を開けるたびに、ビールが腐るんじゃないのと奈津子が言う。

食事をしながら、達郎は公園の蟻を思い出して箸を休めた。穴を塞がれた蟻は何処へ行ったのだろう、何十四何百匹の蟻が巣に帰れずに右往左往している様が目に浮かぶ。塞がれた樹木の穴からは、虫も出られずにいるだろうか。

大きな穴、小さな穴、細長い穴、幾つの穴を塞いだのであるう、数えてみる。一、二、三、四、五、……十、二十、三十、塞いだ穴は五十個はあるだろう。穴を埋めながら、何匹の蟻を殺したのだろう。殺すつもりはなかったが潰れて死んでしまった。

「どうかしたの」

奈津子が飯を盛った茶碗を差し出しながら聞いた。

達郎は黙ったまま茶碗を受け取り、ご飯を一口頬張った。

「日本の米はうまい、本当にうまい」

「そうね、タイ米は口に合わなかったわねー」

奈津子もタイでの生活を懐かしむように自分の茶碗を見

夜明けが遠く、目をとじても眠りへの誘いは訪れてこない。しばらくすると閉じた瞼の中でゆらゆらと揺らぐものがある。水面に浮かぶ藻のようでもあり、紗のような薄い布のようなものかもしれない。達郎は両手で空を切ってそれを剥がしてみたが、状況は変わらない。何度も繰り返してみた。手刀で闇を切り裂く、思い切り空気を掴み取る、両手を激しく左右に振って見たが、揺らぐものは瞼の奥で何時までもゆらゆらとしている。

ゆらゆらとした波間にゆったりとして泳ぐ、甚平鮫を作業船の甲板から眺めたのは、何年前のことだろうか。まだ独身の頃で、今の会社に転職する前だった。そうだ、三十年も昔のインド洋上での記憶が達郎の脳裏に蘇る。石油掘削のプラットホーム(海上構造物)の建設に技術者として、インド人作業員の指導と監督の任に就いてから一カ月が経った頃だった。毎日、毎日、船酔いで胃の中がひっくり返る程の嘔吐を繰り返し、作業船のへりに掴まりながら波間に甚平鮫を見つけた時、達郎はなんだか自分が情けなかった。船酔いに苦しみながら、仕事らしい仕事もできず、その上、インド人作業員ともなかなか上手くコミュニケーションも取れず、もどかしい日々を過ごしていた。

今朝のミーティングも騒がしかった。数人の作業員が達郎や同僚の技術者に今にも飛びかかって来そうな勢いで、

つめている。

達郎は茶碗の中の飯粒を凝視した。飯粒は重なり合って茶碗の中で動いている。

蟻だ、蟻が茶碗の中で右往左往している。

達郎は慌てて卵焼きが乗せられていた皿を、茶碗の上に被せた。

奈津子の手から箸が滑り落ちた。

しばらくの間二人は沈黙したまま、お互いの顔を見つめていたが……奈津子の眉間には皺が寄っている。

達郎は「何でもないから」と言い、少しだけ笑って見せた。

食事が終わり、テレビのプロ野球中継やニュース番組にも集中できないまま、床についた。

眠れない。ライトを消して目を閉じる。身体の向きを何度か変えてみる。仰向けになり、頭を両手で抱えてみた。右手に薄くなった頭髮と柔らかな皮膚の感触がする。頭蓋骨が失われた一部分は円形になっていて、空気が少し抜けたゴムまりのようにたゆんで張りが無い。達郎は掌で柔らかなった頭を撫でてみる。

ふたがない、ふたがない、ふたがない、ふたがない、やはり蓋がない。

蓄積された知識も奈津子との思い出や仕事での実績、留学までして憶えた語学、少しずつ失われていく不安に駆られる。眠りたいと呟いた。

喚んでいた。

「ターバンは、何度言われても取ることはできない」との一点張り、こちらの言い分に耳を傾けようとしなない。

宗教上の理由は心情として理解できるが、安全のためにはヘルメットを被らなければ就業させないと、達郎より若い同僚の言葉に作業員達が憤っている。就業できないと、させないの言い回しが彼らの疝に障ったのであろうか。英語をよく理解できない作業員もいるし、日本人のスタッフの中にも例外ではない。微妙に違う言葉のニュアンスにお互いが苛立つこともある。毎朝、繰り返される出来事にうんざりする。それでも、何とか理解して欲しいと思い、休憩や昼食時に作業員のティーカップにミルクのポットを持って注いで廻ることもある。上司にエンジニアとワーカ―の距離を置かなければいけないと注意されてはいたけれど、外国人労働者を指導する不安な気持ち、そうさせるのかもしれない。

達郎は技術者としての自負も崩れかけてきた時に、十メートルもある甚平鮫が、ゆらゆらと波間に身を委ねて泳ぐ様を見て、自分の気持ちの焦りを覚えた。このインド沖一〇〇キロの洋上で、技術者としての知識や経験を十分に発揮できないでいる、非力な自分をあらためて認識した。鮫に見習おう。心をゆったりと持ち、周りの皆に身を委ねて助力を乞うてみる。

海底の穴は深い、深く深く、掘り下げる。水中で砂が舞い上がり、海底の生物が右往左往する。鋭い杭が打ち込まれて、穴が塞がる。多くの生き物が潰される。逃げ場を失ったものは何処に行くのだろう、達郎はインド洋で掘り下げた穴のことを思い出した。

ふたがない、ふたがない、ふたがない、ふたがない、蓋がない。海底を塞ぐ蓋がない。穴には蓋がある。鉄の杭では駄目なのだ、と達郎は叫んだ。

海底の鉄杭の周りには隙間ができる。その隙間から小さな泡が何千も何万もふつふつと湧き出て来る。泡の出た隙間に海底の砂が、穴を塞ぐように少しずつ滑り込んでいく。泡が湧き出て、砂が滑り込む。小さな泡がだんだん大きく膨らんで、人の頭ぐらいになった。

長い髪の間が達郎の穴の開いた頭蓋骨から突然、ぬーっと出てきた。長い髪が顔にかかり、誰なのか判別できない。女のような気がして、達郎は記憶の糸を手繰ってみる。長髪といえ、奈津子と結婚する前に交際していた女だった。

一度は心を揺さぶられた女だった。

奈津子との交際の中で、達郎はなかなか結婚に踏み切れないでいた頃に、スポーツクラブで出会った女は達郎よりも一回りも年下だった。長い髪を一つに纏めて、屋内のラ

かしら、本当に嫌になる——

達郎は忘れていた女が言ったことを、曖昧な記憶の中から紡ぎ出して反芻する。そして、嫌になると言った女の横顔が可愛かったことを思い出した。

事故後の後遺症で記憶が寸断された今、突然、鮮明な形で昔のファイルが開かれたのは何故だろうか。否、ファイルには綴られていない、消去したはずだ。気づかない間に穴の開いた頭蓋骨から滑り込んだに違いない。出てきて欲しくない思いに胸が焼ける。

わからない、本当にわからない、わからないと言いがら首を振った。

難しい年頃の三人の子供達の父親ではなく、友達になれよばよと思いがら、達郎は懸念がなかったわけではない。奈津子と二人だけの時間はないに等しい。子供達の進学や成績のことなど、話題は子供の話を中心だった。恋愛中の甘い雰囲気にも浸る機会もないまま、結婚へと進んでいくことに、達郎が戸惑いを感じ始めた時期だった。

長い髪の間と出会った。

ランニングコースを走る女の長い脚が、ランニングパンツからすらりと伸びて、達郎の気持ちに挑発する。一回りも年下の女は若いエネルギーの発散を、無意識のうちにエロスに変える。達郎の不安定な気持ちに女の姿が纏い付い

ンニングコースを達郎に遅れまいと必死になって走る。汗ばむ女の健康的な肢体は眩しかったが、達郎は自分とは縁のないものだと思っていた。

「ねえ、海外で仕事をしてるんですって、何処に行かれたの？ 聞かせて」

トレーニング仲間の誰かに聞いたのだろうが、矢継ぎ早に話す女に達郎は戸惑いを感じた。出会って半月も経っていないのに、まるで何年も前からの知人のように、否、友達のように話しかけてくる。

「私、豆腐屋の娘で、高校出てからずっと家の仕事を手伝ってきたから、外国なんて行つたことないの……何処へも行ったことないんだから」

二十代半ばと思えないほど幼い話しぶりに驚かされたが、家業を切り盛りする様子を聞かされた時、彼女の意外な面を知った。

——豆腐一丁、何十円かの単価でしょ、商売が細かいのよ。この頃、大型スーパーが安い豆腐を売り出すからチョット大変なの。私の家は小さなスーパーや昔からの八百屋さんがお客でしょ、いつまで続くのかしら。時々、反対されても会社勤めをしたほうがよかつたかなと思つたりして……豆腐造りは主に両親だけれど、朝早くから配達するのは私の仕事、大豆の調達から帳簿の管理、それから、油揚げは手伝うわよ……なんで、豆腐屋の一人娘に生まれたの

てくる。女に誘われるままに、食事を共にした。きつかけ

は彼女の方だった。達郎は奈津子の存在を気に掛けながら、若い女に惹かれていった。奈津子の分別のある態度や成熟した女の魅力とは違う、澁刺として硬く、青い匂いが達郎を刺激した。

「好きというか、気になっている女性がいる」

達郎の告白は突然だった。何の予兆もなく、愚直にである。

奈津子は達郎の視線をしつかりと受け止めてから「そう」と言った。

二人は黙ったまま、公園のベンチに座っていた。

西陽が痛いほどに背中を刺し、握つたり、開いたりしている達郎の手のひらや額に汗が滲む。唐突に切り出した告白の詳しい説明や経緯も話せずにいる自分がもどかしい。

「あなたの、好きにしたら」

渴いた声が出た。立ち上がった奈津子は達郎と視線を合

わすこともなく、振り返りもせず早足で歩いて行った。「好きにしたら」と言われて狼狽えた。別れる、別れたくない、許せない、何を言われても仕方がない状況で、矛先が自分に向けられ、決断を委ねられた。達郎は「好きというか、気になっている女性がいる」と確かに言った。しかし、それでどうしたいか考えが纏まっていたわけではない。奈津子と別れて結婚したい、との強い思いがあったわ

けでもない。結婚願望は強かったが、一回りも若い女性との結婚生活を描くことに躊躇いがあった。

恋がしたい、恋愛がしたい、という思いが達郎の肉体に積み重ねられ、澱のように溜まっていった。それが、じくじくと発酵して、喉元から吹き出してくるようだった。

中学を卒業して、寮のある高等専門学校で五年間学んだ。全校生徒のうち女子は十名程で、男の世界だった。学業の他は陸上クラブで、汗まみれになってグラウンドを走っていた。関心はあったが、女性に縁がなかった。クラスメートの中には、他校の女子学生と付き合っている者もいたが。男女の性の知識も人より疎かった。

「初潮って知っているだろうが、知らないヤツはいるのか、いれば手をあげる」

手を挙げたのは達郎一人だった。

高等専門学校一年の保健の授業だった。

「冗談だろう」と言う声が出て、後方から笑い声が耳に入った。寮に帰ってから、辞書を引いた。そして、自分があまりにも無知で幼稚だったことを思い知らされた。その夜はクラスメートの嘲笑が耳につき、なかなか寝られずにいた。

達郎はあの時のことが、その後の恋愛に少なからず、何らかの影響があったと思う。いつも恋愛に臆病だった。自分から積極的に女性に近づくことなどできない。

持った傲慢さを突く。ある時、業者が持ち込んだ8ミリカメラのブルーフィルムを観るということになったが、達郎は頑なに拒否をしていた。奈津子はその様子を耳にしながら達郎の顔を見て、笑いながら帰宅した。

翌日「結局、あなたはフィルムを観たの？」

切り出した奈津子の一言が達郎の胸に、意地悪く響いた。

「観るわけないだろう」

「観るわけないって、嘘よね。そんなに意固地になるって、観たいの裏返しよね。正直じゃないわ。観ると、自分が卑しく思えるのかしらねえー。あなたの真面目ってそう言うこと？ つまらないことで格好をつけるんだ」

確かに、社内の評判は真面目な男で通っていたが、どうだろう？ 心の内に潜んだものを見透かされているのか。奈津子は達郎に向かって、いつも挑戦的だった。

——体制を批判するけど行動したことがない。結局は日和見主義と大差ないわね。デモにも参加したことがないのに三里塚や安保闘争、ベトナム戦争や反戦云々と偉そうに言わないで欲しい。頭だけ、革新的でもね——

そこまで言わなくても、と達郎は思ったが意外と冷静に彼女の意見に耳を傾けていた。

奈津子との論戦は結婚してからも時々、熱を帯びる。

長い髪の女との交際は三カ月で終わった。自分は奈津子と別れて結婚したかったのか、わからないままで相手から

好きと言われたこともあるが、そこから先に進めない。一歩進むまで時間が掛かり、挙げ句の果てに「あなたは、真面目なのね」と言われて終わりになる。

少しは女の喜ぶことや気の利いた態度ができないのかしらねー、と奈津子にも言われたことがある。

仕事も男の職場。国内外のプラント建設に二十一から従事してきた。奈津子とは建設現場事務所で出会った。臨時採用の事務員として彼女は男の現場に彩りを添えたし、仕事ぶりは目を見張るものがあった。最初は事務所の掃除や電話番、お茶汲みなどの雑役係だったが、業者との遣り取りも自から積極的にするようになった。

「電話の向こうで、誰か男のいいませんか？ ですって。用件は私にもわかるようなことでも」

奈津子の存在は事務所の雰囲気柔らかくした。時折、業者の監督や職人の怒号、罵声が飛び交う環境の中で、女性がいることで、皆が感情をコントロールするようになった。

達郎も少なからず、彼女の存在が気になっていった。たつた一ヶ月前の奈津子が凄く大人に思えた。結婚、子供、夫の死、達郎の考えの及ばないところで遅く生きていく彼女に、何でも拘りなく話ができるような気がした。

奈津子との関わりの始まりは、自分を素直に表現することにあった。彼女の指摘は達郎の虚飾を剥ぎ、内面に隠し別離を告げられた。結果はなんとなく予測できたが、中途半端な気持ちでいた自分に、相手の方がスパッと決断してくれたことで、迷いが吹っ切れた。

奈津子にすまないと思った。

それでも、達郎は心のどこかで自分を弁護していたと思う。長い髪の女とは何もなかったから……奈津子に気持ちの揺れを隠したままでは、かえって不実だと思った……一時の気の迷いだった。結婚したからいいではないか……。言葉に出したこともなく、そんな素振りも見せていない。けれども、達郎の言い訳やずるさも奈津子はわかっているだろう。彼女の心の傷痕は深く、深く、今でも癒されてはいないのかもしれない。

「妻になったから、全てが許されるわけではないの」
時折、彼女が見せる表情の中に、過去の切ない思いを包み込んでいるような陰りを、見逃して来たのかもしれない。気づかずにいた自分が腹立たしい。達郎は胸がつかえた。しかし、この胸のつかえを、上手く話すことができない性格が疎ましい。素直に吐露できないまま、時が過ぎていくのか……。

忘れていた、葬り去った苦い過去が、穴の開いた頭蓋骨からずると流れ出して来ている。そうではない。新しいファイルに記述して、滑り込もうとしているのだ。

目覚めが悪く、頭が重い。

達郎は厚切りの食パン一枚を軽めのコーヒード流し込むように食べる。奈津子は庭の草取りをしている。今日は二人で草取りをするはずだったが、八時過ぎに目が覚めたので「涼しいうちに」と言つて、奈津子一人が庭に降りた。帽子を被り、達郎に背を向けて草を抜く姿に視線を這わせながら、二杯目のコーヒートを口にした。

奈津子が草取りの手を休めて立ち上がり、振り返つて笑う。そして、首に掛けた赤いスポーツタオルで顔を拭いた。小柄な体に大きな庇の帽子がバランスを欠いて可笑しいが、それでも似合わなくはない。達郎は奈津子の笑顔に應えて手を挙げた。笑顔が痛い、笑顔が達郎の気持ち揺さぶる。今頃、あの豆腐屋の娘が途切れた記憶の中から現れたのかと思うと、溜息が出た。

昨夜の夢が気に掛かったまま、達郎も奈津子と背中合わせで草取りを始めた。

今日は午前中に草取りをしたので、朝の散歩は取りやめ、夕方まだ陽の高いうちに家を出た。五時を過ぎても気温は高く、まだ三十度を超えているだろう。この数日間、急に蟬の亡骸が多くなり、道路のあちこちに転がっていて、靴の先が当たった。動かないと思つたら、かさかさとして弱々しい羽音をたてた。達郎は拾い上げて手のひらに乗せ

う。そしてまた一つ、消去した嫌な記憶が滑り込んで来るのだろうか

不安な気持ち拭いきれずに、空になったジュースのアルミ缶を握り潰す。その時、脇のあたりに痛みが走った。目をやると、短パンから伸びた両足に黒い点が張り付いている。一匹ではない、何匹もいる。両足がチクチクと痛む。黒い小さな蟻が這い上がって来る。

「ウワー、なんだ、なんだ」

達郎は思わずベンチから立ち上がり、叫びそうになった言葉飲み込んだ。

蟻が襲ってきた。昨日潰した穴から這い出てきた蟻たちが、達郎を攻撃した。両手で脚を払う、何度も何度も振り払う。やはり、今日も穴を塞いで置かなければいけないかった。情けを掛けたのが間違いだ。蟻が問題ではない。穴が、穴が問題なのだ。穴は塞がなくてはいけないのだ。穴には、蓋がいる。

達郎の頭にも穴が開いていた。後、二週間したら蓋を付ける手術がある。後、二週間の辛抱だ。否、二週間もの間、この穴と蓋の呪縛に苦しめられるのか？ 急に目眩がしてその場に座り込んだ。じっとしたまま、目を閉じて呼吸を整えた。長い時間そうしていたように感じたが、実際はあまり、時間は経っていないのかもしれない。よろけそうになりながら、立ち上がり、両手を広げて深呼吸をした。熱

た。蟬に触れたのは何年振りだろうか、遠い昔のことだ。

そうだ、小学校の頃に近所の友達と蟬や虫取りに行つたことがあったが、兄や従兄弟達と三角ベースの野球に夢中になっていたので、あまり多くはない。まだ生きている蟬の羽根を窺ったことがあった。トカゲの尻尾を切つたこともある。さすがに蛇は苦手だったので、友達を殺し、皮を剥ぐのを遠巻きに見ていた。昨日も沢山の蟻を潰して殺した。樹木の穴も塞ぎ、虫も殺したかもしれない。いっぱい殺生をしてしまった。

昨日の散歩コースを辿つてみた。穴を塞いだ場所を探す。穴を埋めた場所はすぐにわかった。土の色が変わっている。塞がれた穴の辺りに新しい穴ができている。あちらこちらに穴ができて、蟻が入り込んでいる。達郎はそれらの穴を見つめたまま、考え込んだ後に穴を塞ぐのは止めた。樹木も点検した。樹の穴は塞がれたままで、何の変化もなかった。樹の中に虫などいなかったのだろうか、それとも死んでしまったのだろうか、わからない。

一時間ほど歩いて、自動販売機でジュースを買った。ベンチに座り、喉を潤す。果汁の甘さが汗をかいた体内にまわりつく。一息ついて帽子を取り、頭の汗を拭いた。穴の開いた頭蓋骨から頭皮を突き抜け、風に乗ってヒラヒラと飛んでいったものがある。

「今日も何かが、逃げていった。きつと逃げていったらいい空気が喉元から体の中心に落ちて行く。達郎はゆつくりと歩を進めながら、先程の場所に行く。

今日もまた、蟻の穴を塞ぐ。明確な意志があるわけがなく、心を失したように。達郎は手に土を握り、穴に詰める。憑かれたように穴を塞いだ昨日とは異なり、ゆつくりと穴を塞ぐ。時々、視線が宙に浮く。一つ塞ぎ、手を休めてまた、ゆつくりと病葉を掴んだ。はらはらとそれを撒き散らす。

今夜も眠れない。隣で奈津子は少し唇を開けて眠っている。時々軽い寝息をたてている。

夕食時に奈津子が手術のことを話題にした。達郎の頭蓋骨の一部はタイで切除し、破棄されてしまった。タイの医師は、直ぐに蓋をすることができないし、その上、飛行機に乗って帰国してはいけないと言った。気圧の変化が、脳に異常をきたす危険性があると力説した。その確率は数パーセントでも、医師として危険な状況を認めるわけにはいかない。この地にとどまって再手術を受けるべきだと言う。それらの経緯を乗り越えて、達郎は帰国した。

不安がなかったわけではない。付き添ってくれた会社の上司達や達郎自身も結論が出ないまま、何時間も堂々巡りの話し合いが続いた。そして、達郎の帰国を決めたのは奈津子だった。

「数パーセントの危険性なら、飛行機が落ちるよりも安全です。引きつけを起こす心配があるのなら、私が対応します。割り箸にハンカチを巻き、舌を噛みきらないように処置します。もしもの時のために、お薬を用意してください」

奈津子の言葉をどのように伝えたのか覚えていない。上司や総務の人だったのか定かでない。達郎の日本に帰りたいとの切実な思いを、奈津子がしっかりと受け止めていた。割り箸云々は、少々乱暴な意見ではあったが、医師が奈津子の勢いに圧されてやむなく承知した。血相を変えての彼女の訴えは、医師だけでなく達郎や周りの人達をも驚かせた。やはり、奈津子は強い。夫に死に別れて、三人の子供を育てた強さがある。早朝に牛乳配達をしてから、達郎の現場で働き、夜は寿司屋で皿洗いをしていた。それでも、周りの者に苦勞を感じさせない明るさがあった。いざという時に、達郎の考えの及ばないところで生きてきた強さと、決断力があることを再認識させられた。

「頭の骨の代わりに、セラミックで大丈夫なのかしら？」
何度も医師に確認したことだったが、奈津子がまた、聞いてきた。

「先生と日本の技術の高さを信じるしかないよ。今はコンピュータで開いた穴と寸分違わずにセラミックで蓋が作れるそうだ。それに強度は人骨よりもあるというから、心配ない」と言いながら、達郎自身全く心配していないわけり返す。掴んでは落ちる、そして碎ける。そのうちに、白い物体が達郎の穴の開いた頭にぴったりと収まった。やっとな、ふたができた。ふただ、蓋ができた。両手で頭を抱えると、穴がない。穴が塞がった。やっと安心して眠りにつける。

心地よい眠りの中で、誰かが声を荒げている。聞き覚えのある声だ。目を凝らすと、次兄の姿が見えた。

「俺の貯金箱から金を盗んだのは誰だ、達郎か？ 違うのか？ 正直に言え」

達郎は自分の名前を呼ばれて、体が硬直した。確かに貯金箱からお金を抜いたのは自分であった。しかし、盗んだつもりはない。明日、小遣いをもらうまで、少しの間、借用して、後でそつと戻すつもりだった。たった一日の違いで露見してしまった。次兄は性格が荒い。正直に名乗り出ても、許してもらえそうにない。次兄の目は達郎に注いでいる。思い切つて謝るしかないかと覚悟を決めた時、四男の兄が頭を下げた。と同時に次兄の平手が飛んだ。達郎の直ぐ上の兄が庇ってくれた。

赤くなった兄の頬を冷やすために、濡れたタオルを持って行った。兄は「何も言うな、黙っておればいい」と達郎の頭を拳骨でコツンと叩いた。

そうだった、達郎は兄達に詫びていない。とりわけ、庇ってくれた兄に礼を言わないまま過ぎて来た。また、一つ

ではない。返す返す、タイで破棄された頭蓋骨に未練が残る。日本では、切除した物をそのまま再手術の時に使用する。医師の違いを今更嘆いても仕方がないと思いつながら、捨てられた頭蓋骨は何処へ行ったのだろうかと考え。焼却処分されたのだろうか。骨は焼かれても残るであろうから、何時かはタイ国の土に還るのだろうか。

奈津子に気づかれないように床を出て台所に行く。冷蔵庫の中を覗いた。達郎は缶ビールに手を伸ばし、小さい方を取り出した。プルトップを一気に引き上げ、缶を口に運ぶ。苦い。何ヶ月ぶりに飲んだビールが旨くない。何故だろう。手術が終わるまでアルコールを口にしない方がいいような気がしていた。別に決め込んでいたわけではない。手術の前に、精進潔斎をして臨むような気持ちがあったのかもしれない。残したビールを流し台に零すと、ビールの匂いが鼻孔を抜けていった。

少しばかり口にしたビールのせいだろうか？ 意識が朦朧としてきた。

ふわふわとしたクラゲの頭のような物が浮かんでいる。足のないクラゲに似た白い物体だ。捕まえようとしているのは、達郎だった。頭髮も頭皮もない頭蓋骨が欠けたままの姿で、宙に浮いた白い物体に手を伸ばそうとしている。掴めそうで、なかなか掴めない。やっとな掴めたと思つたら、手の中からすると落ちて粉々に碎けた。何度も何度も繰

忘れていたことが、滑り込んできた。

途切れた眠りの中で、今度は大勢の声が重なり合つて押し寄せて来る。

何か叫んでいるようだが聞き取れない。日本語ではない。片言の英語が飛び交っている。ターバンをした男達が、群がって騒いでいる。そうだ、インド洋上で、プラットホームの建設をした時のことだ。職を求める労働者達が、面接の順番がなかなか来ないことに苛立つて騒ぎ出したのだ。何日もかかってボンベイまで歩いて来たと訴えて、雇ってくれと頭を下げる。親が病気で医者にかかれぬし、薬を買う金もない。採用して欲しい理由は、十人十色だが、皆、切羽詰まった様子が窺える。一週間のうちに採用する労働者を決めなければならぬ。何百人の人達から選び出すのは難しい。特別の技能を持ち合わせていれば採用も容易い。それでも、溶接は技能試験を要した。インド人は皆英語を話せるわけではない。地方の出稼ぎ労働者は、ほとんど英語を話せない。身振り手振りで伝えようとする。

達郎は心労で倒れた。朝、起きることができなかった。発熱と激しい下痢や嘔吐に苦しめられて、病院に担ぎ込まれた。二日間、病院のベッドで点滴を受けて安静にしていたが、三日日にはまた、面接に立ち会った。その日は溶接の試験があった。結果は傑出した技能の持ち主はいなく

て、皆、同じような技量であった。それでも、全員採用するわけにはいかない。苦渋の後、溶接技術の重要な決め手になる「裏波ビード」の揃い具合に乱れがある幾人かを不採用とした。その時の一人が、達郎の手を掴んで必死に採用して欲しいと訴えた。達郎は理由を説明して、なんとか理解を求めようとしたが、わかってもらえない。見かねたインド人のスタッフ数人が、男の体を抱きかかえるようにして、外に連れ出した。達郎は救われたと思った。試験の前から、何度も何度もその男は達郎の顔を見て、目で何かを伝えようとしていた。彼の視線を痛いほど感じながら、何も手立てを施さず、厳しい決定を下した。

事件は翌日起きた。達郎の腕を掴んで放さなかった男が、事務所に火を放ち、捕えられた。事務所にいたインド人の技術者が大火傷をして、病院に運ばれた。幸い命は助かった。罪人となった男は重い罰を受けることだろう。達郎の職歴の中で、このことが一番辛い出来事だった。日本では考えられないことだ。あの時、もう一人ぐらい達郎の裁量で採用できたかもしれない。否、違う、言動に配慮が欠けていたのだろう。長い間、この事件が達郎の頭にこびり付いていた。特に海外で仕事をする時には、肝に銘じていた三十年前の事件で、甚平鮫を見る前のことだった。

この何年間、思い出すこともなく忘れていたのだ。あれほど、強烈に刻み込まれた事件をすっかり忘れていたのだ。

のだろう、気がつかないでいた。達郎がビールを一口飲んで床に就いた時は、微かに寝息をたてて眠っていたはずだ。

今日は、病院に行く日だった。明後日から病院が夏休みに入る。手術前の診察がある。

「今日は神社の清掃があるから、タクシーで行ってね」
そうだった。数日前から奈津子に言われていたが忘れていた。

いつもは奈津子が車を運転して二人で病院へ行く。達郎は頭に蓋ができるまでは、車の運転を止められていた。
「バスで行くから、いいよ。たまにはバスに乗ってみるかな」

「暑いから、タクシーで行けばいいのに」
節約、節約と言って達郎は笑った。

診察は午前中で終わった。携帯電話を掛けたが奈津子は居なかった。病院の食堂で昼食を摂り、本屋に寄ってから帰ると留守電にメッセージを入れた。

バスに乗る前にもう一度、連絡してみた。奈津子の声が耳元で響く。

「診察、問題なかった？ コーヒーを淹れておくからね。ケーキも買ってきたから、二人で昼下がりのティータイム……なんてね」何だか奈津子の声が、今朝の心配した様子とは違い、心なしか明るい。

人間はなんて皆、勝手な生き物なのだ。あれほど自戒していたのに、記憶の端にも留めていなかったのか？ 人、等しくではなく、達郎がそうなのだ。

頭が痛い、痛い、頭がぐるぐる回っているようだ。誰かが首を締めている。長い髪が首に巻き付いている。次兄の平手が頬を打つ。ターバンを巻いた男が追いかけて来るが、顔はわからない。目鼻がない。ノッペラボウの男が追いかけて来る。それらが穴の開いた頭の中に、渦を巻いて滑り込んでくる。

ふたがない、ふたがない、ふたがない、ふたがない、蓋がない。穴には「蓋」がいる。

枕元に奈津子が座っていた。水差しが置いてある。

「何だか、辛そうだった……ふたが、ふたが……」

奈津子は語尾を口ごもったまま、冷えたタオルで達郎の額の汗を拭く。

「再手術まで、後わずかだからね。蓋ができたなら、体力も回復して元通りになるって……先生も大丈夫だと言ったわよね」

思わず、達郎はタオルを持つ妻の手を、両手で挟み「有り難う……奈津子」と、胸の内を礼を言った。

また、夢を見て魘されていたのだろうか。何か、叫んでいたのかもしれない。奈津子はいつから枕元に座っていた

帰宅時間を告げて達郎は携帯電話を切った。

玄関のベルを押したが、応答がない。ドアのノブを回した。鍵が掛かっている。

達郎はズボンのポケットから鍵を出して開錠した。ドアを開けた。奈津子が玄関の上がり框に三つ指をつき、少しだけ頭を下げて座っている。

奈津子の頭上に蓋が載っていた。

驚いた達郎の視線が奈津子の顔を捉える。目が合うと、白い歯を僅かに見せて笑った。

アルミの鍋蓋が、今にもずり落ちそうに、奈津子の頭に載っている。

ふた、ふた、ふた、ふた、「蓋」がある。

受賞の言葉

丹羽加奈子

優秀賞受賞の連絡を頂き、驚きました。選考委員の諸先生方や関係者の皆様には、心より、お礼申し上げます。賞は小学校の徒競走以来のことですので、素直に喜んでおります。自己流に文章を書き始めてから二十年、なかなか思うような作品ができませんでした。今度の受賞で、やっと小説の尻尾を捕まえられたのか、と思ったりしています。

受賞作は家族の事故という事実を、デフォルメして小説にしました。モデルにされた家族には申し訳ないと思っていますが、これは、小説ですので許してもらいます。

いつも、身辺に小説の題材になるような出来事が多くて、私小説に近いものばかり書いていますが、本当はもっと違うテーマで書きたいと思っています。

指導頂いている「じゅん文学」の戸田主宰と、厳しくも温かい批評をして下さる同人の方々に感謝とお礼を申し上げます。



丹羽加奈子

にわ かなこ

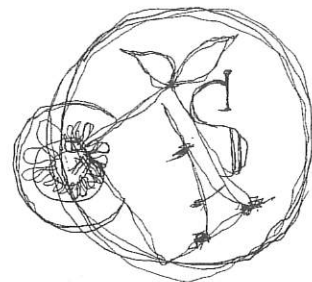
1946 名古屋生まれ

戸田鎮子先生の小説教室を経て、「じゅん文学」の同人となる。「じゅん文学」創刊時より所属し、今日まで戸田主宰の指導を受ける。

小説、エッセイを同人誌に発表している。

子供の成長記録や日々の雑記、エッセイなどを書き綴っているうちに、小説を書きたいと思うようになったことが、小説を書く切掛でした。

中部バンク理事



第8回 銀華文学賞優秀賞

片影

今月号の社報もまずはじめに、「おくやみ」の欄のあるページを開いた。いつごろからそうなったのかといえは、一年半前ぐらいからのような気がする。それというのも、わたしは六十五歳で定年退職するまでの四十三年の間新聞社に勤務して、その大半は週刊誌編集部でレイアウト専門で過ごしたが、その編集部で記者をしていた、たしかわたしの退職時には、まだ三十五歳だった後輩の氏名を、いつもは素通りしていたその欄に見つけてからというもの、妙にその欄が気になってしまったのだ。

毎月、月末になると退職者にもかならず送られてくる社報は、二十数ページもある編集も企画も内容も充実したものが、退職してすでに三年もたっているし、現在

星野透

六十八歳という年齢のせいもあって、編集者には申しわけないのだが、社の指針とか業績、とくに人事やイベントなどには関心が薄くなってしまっていることもかなり影響している。

その後輩の氏名を目にしたときは、どうせ同姓同名だろうとしながらも念のために経歴を読んでみると、わたしの知る後輩に間違いなかったが、それでもしばらくは疑っていた。それは、事件続きで徹夜が重なっても、大丈夫ですよ、健康だけが取り柄ですからと高校、大学とラグビーで鍛えたという駆を自慢していた童顔の彼が死んだとはどうしても信じられないからだ。死因は肝臓癌とあった。そういえば、日本酒が好きで二日酔い醒ましのドリンクを狭い

給湯室で、こっそり呑んでいた大きな背を何度か見かけたことがあった。

働き盛りであった彼は、もしかすると病院のベッドで無機質な白い天井を穴が開くほど見つめて、何のために今日まで生きてきたのか、どんな罪を犯したというのか、なぜ愛しい家族を残してこんな早く逝かなければならないのか、いったい運命とは、どんな権限を有し、どんな形をし、どんなにおいを持っているのか抗議するようにその答えを求めたが、結局は、不運の究極は死なのだと思わされて嗚咽を洩らしたかもしれない。

その夜のわたしは、彼はこれまでに身も心も融けるような、この世にほんの一握りしかない真の幸福というものを短い一生で幾つ享受できたろうか、老少不定という言葉を思い出したりして、年甲斐もなくセンチの淵にはまってしまう容易に寝つかれなかった。

自分の年齢からいっても、さほど遠くない日に、新聞と同じ大きさのゴチック文字の氏名の横に黒い傍線を引かれて、この「おくやみ」の欄に載るのだろうと思うと、侘しいというよりも、それが何人の目に触れ、何人の者が、たとえ臆にしても生前のわたしを偲んでくれるだろうか、素っ気なく、「そうか、とうとうあいつも死んだか」、たったそれ一言で通り過ぎて行ってしまうのだろうかなどと、胸の底に冷たい悲哀の波紋の広がりを意識するのだ。

毎号毎号、「おくやみ」の欄には、当然のようにだれか

しらの氏名が載ったが、元上司、先輩、同僚、部署は違っていた。もちろん、一人一人の顔が懐かしく脳裡を過ぎるのだが、心のうちで合掌するのみで弔問に行つたことは一度もなく、その場限りで忘れてしまうのだから、自分だけが偲んでもらおうなんて虫がよすぎるのだ。もつとも、「おくやみ」の欄で知つたときには、すでに葬儀から一か月近くもたつてしまつていたので、今さら弔問したところでとか、面倒臭いとかなつてしまふのだが、それはそれだけ老いたということに通じるのかもしれない。

その月の号もいつものように真つ先に「おくやみ」の欄のページを開いて見た。その途端に、これは見間違いだと思わずわが目を叱つたのが、同じ週刊誌編集部でレイアウトを二十年以上も一緒に担当してきた同僚の死亡記事であった。青天の霹靂、虚を衝かれた死であった。わたしより誕生日が二か月早いだけの同年齢でしかも通勤電車も、ある区間だけだが一緒だったということもあつて親しくしていたのだ。長身でスリムで酒も煙草も一切やらず病欠など一度もしたことのない彼の死因は意外にも脾臓癌であった。

取り程度で逢つたことはなかった。ところが最近、虫の知らせとでもいうのだろうか、お互いに年金暮らしにもすっかり慣れて生活のペースもそれなりにつかめたことだから、そろそろ在職中によく寄つた社の近くの喫茶店で逢つて、近況を交換し合つたり、旧交をあたためてもいいなと考へていた矢先の訃報であつただけに、ふいに、すつと心の中に陽炎のような死の影に忍び込まれたようで、自分の命の清算も明日どころか今日、いや今夜中にもついでにまうのではないかと、老人ゆえに心臓が縮こまるような不安の渦を巻き起こしてしまうのだ。

定年退職も誕生日の關係で彼のほうが二か月先であった。彼は社内の合理化で新聞の発送部から自ら希望して週刊誌編集部に異動してきたのだが、口下手で寡黙のうえに何事にも歯切れが悪くて消極的なので、まだるっこい点があつたもののレイアウトはたしかで信頼がおけた。そんな彼とはなぜか馬が合い、子どものことや定年後の生活設計、旅行、ドライブなどの話もした。わたしに肩書が付いても、腹のうちはともかくとして妬むことも空々しくもならず、自分のことのように喜んでくれたし、仕事に関してもあれこれ親身になつて、それとなく陰からフォローしてくれた。

それでもわたしは焼香には行かなかつた。というよりも行けなかつたのだ。葬儀は一月近くも前にすんでいたこ

ともあるが、在職中の雪が積もるほど降つていたある深夜、二人で乗つた社の車での自宅送りの折に、車のエンジン音を耳にして急いで迎えに出たのだろう、傘を広げて道端に立つ奥さんを一度だけ見かけたことがあるが、おそらく今は孤独と哀しみのどん底にいるはずのその奥さんの前に、同じ職場で親しくしていたうえに、同じ年齢、同じ年に定年退職している者としては、わたしの罪ではないとはいへ便々と生きている姿を出せば、どうしてうちの主人がと呼吸を重苦しくしての恨みを買ひそう、なんとなく気が引けるものがあつたからだ。生前の親密だつた付き合いからいっても礼儀からいっても、そんなつまらないことに捉われずに弔問すべきだとは頭が痺れるほどわかつてはいるのだが、その正体のない「なんとなく」が、わたしを迷わせ腰を退かせて、しゃきつとその気にさせてくれないのだ。

酒を呑まない彼とはおでん屋にさえ入つたことはないけれど、外で昼食を摂つた後、かならずといつていいほど行きつけの喫茶店で珈琲を愉しんだものだが、そんなあるとき、話の前後はどうであつたのかすっかり失念してしまつたが、彼がポツンと呟いた今も忘れていない一言がある。「どうも人間というやつは、幸も不幸も過ぎてしまつと卑しくなつていけない」

おそらく、その点、おれは幸いにしてそのどちらでもない、つまりごく平凡、普通だからよかつたと言ひたかつた

のかもしれない。また、これもなんの話をしている口にしたのか記憶にないのだが、わたしが、

「これだけ大勢の人間がいても、ほんとうの自分を知っている者が何人いるか」

と言ったとき、目を硬くして、じっと皇居の森を見つめたまま、いかにも自分に何事かを問いかけていたような横顔が、枝の先に一つだけ残っている柿のように心の隅に引っ掛かっている。

それでもわたしは奥さんに、月並みな悔やみの言葉に、二、三の思い出を選んで記した手紙を出した。数日後に届いた返事のはがきには、なかなかの達筆で、わたしの知らない主人に泣きました、現在はただただ淋しく、ただただ哀しく、ただただ虚しいのですとあった。そのはがきを手にしたままわたしは、人間の命が不朽でないことぐらい小学生でも知っているが、ときにはなんの前触れもなく、抵抗も言いわけも受け入れずに一方的に命を奪っていく無慈悲な死に対して戦慄をおぼえると同時に抑え切れない怒りに駆られるのだ。嘗々と勤めたすえに、やっと手に入れたしがらみの忍苦から解放された残りの人生を、どんなに気随気ままに生きようとしても、いつどこで思いがけない局面にぶつかって呆気なく果たせなくなるかもしれないのだと、すっかり考えさせられてしまったわたしは、それから数日後の夜、降り出した雨の音を聞いているうちに、これ

までに感じたことのないものに、ふと胸のうちを触れられた気がして、老眼鏡を掛けて趣味の木目込み人形を一心にする妻に、それとなくを装って彼の死を話した後、わたしが死んだ場合の社への連絡事項について世間話をするような調子で、まずは人事部に死亡日と死亡原因、葬儀の予定を知らせる、OBの身分証明書を返還する、そうすれば、本社や支局に設けられている掲示板に死亡通知が張り出されるし、社報にも載ると話したが、聞いているのかいないのか、それとも、まだまだ先のことだとしているのか、妻は顔色も手をも一度も止めず、ほとんど上の空で聞き流しているようであった。だが、今にして思うとそれは、けっして上の空ではなくて、夫が真剣に話す自分の死に関する話を、いったいどんな顔をして、どう聞いていれればいいのか判断に窮してそうしているしかなかった一種の思いやりのポーズであったのかもしれないのだ。

命の洗濯日和のようなやわらかな初秋の日差しを浴びながら駅前前の書店から畑道を辿りながらのんびり歩いて自宅に戻ってくると、机の上にB5判大の茶封筒が置いてあった。今月号の社報である。さっそく開封して、いつものように怖いもの見たさのような、知った氏名が載っていないことを願う複雑な躊躇に揺れながらも、まず「おくやみ」の欄のあるページを開いた。一人の氏名も載っていないに

こしたことはないのだが、現在の正確な数はわからないけれど、現役社員、OBを合わせればおそらく三千人以上にもなるのだろうかそれは無理な望みといていいのかもしれないのだ。そのとおりで、やっぱり残念ながら四人の氏名が載っていた。これは明らかに錯視だが、ゴチック文字の死亡者の氏名の横に引いてある黒い傍線が、どういっわけか今日に限って線香のように思えてくるのだ。

一人一人、順に見ていった。三人の氏名には記憶がなく、経歴を読んでも同じ部署にいたことはなかった。ほっとして四人目に目をやると中岡順子とあった。一瞬、四文字が激しく入れ替わり、そして崩れたが、気がつくとき苦笑し、それはないよとはつきり声にしていた。それでも経歴を読んでいくうちに今度は、動悸が空打ちをしたようなショックを受けて呆然となった。

二十六歳とまだ若かったころのわたしが、たとえ一時期でありその動機がどうであれ、心惹かれて好きになった三つ年上の中岡順子に間違いなかった。死因は心筋梗塞で死亡は九月十日とあった。やはり一か月近くが過ぎている。それでもと、なおわたしは念のために七年前の退職時の社員名簿を引っ張り出してきて、記事と名簿の住所に赤鉛筆で線を引いて、一字一字照合してみた。まったく同じであった。それでも、どうにも信じられないばかりか、衝撃で気持ちのやり場、ピントの合わせどころを失って、なぜか

周りばかりがやたらとまぶしい穴の中に、ほんやりと突っ立ったまま現の間を行き来していた。

中岡順子は知的でいつも屈託がなく朗らかで、ときにボーイッシュで、ときに伶俐で、そのうえ、はっと驚かされる意外性のある女でもあった。わたしにもその責任の一端があったのかもしれないが、女としてはおそらく虚しかったであろう人生を送った中岡順子がこの地球上から影のように、ふいと消えてしまった。死んでしまったのだ。人の命ほどわからないものがこの世にあっていいものかとうろたえているうちに、よほど暗然としていたと見えて、年甲斐もなく目頭を潤ませてしまっていた。

あれは、入社して四年目のたしか四月のはじめであったと記憶している。

わたしはそれまでは新聞の方のスポーツ記者をしていたが、記事でミスをしたわけでも、取材で問題を起こしたわけでもないのに突然、新聞の編集局から出版局の校閲部に異動になった。当時の出版局校閲部は週刊誌、月刊誌、単行本、科学雑誌、専門書など出版局で刊行するもの一切の校閲を担っていたので、地味な仕事の割には生半可な知識や底の浅い雑学が通用するほど甘くはなく、校閲記者としては、字句ばかりではなく、スポーツ、演劇、政界、学術界とあらゆる分野に精通しているように、つねに努力と勉強、注意力を求められた。それが元来わたしのような飽き

つぼくぞろつべえな性分の男に堪えられるわけがなく、もういやでいやで酒を呑んで一人愚痴り、一か月で異動願を部長に提出したぐらいであったが受け入れてもらえはらずもなく、赤鉛筆を手に半ば不貞腐れて、いつ社を辞めようかと神経を筋きんにして真剣に考えていたぐらいである。そんな最中のある日、部長から中岡順子と組んで単行本にする著名な作家の小説の最終校了までを任された。二人に任されたとはいっても、はじめから中岡順子が一人でやるのと同じようなものだから、たとえ発売されてからミスが見つかったとしても、それはあくまでも校閲の先輩であり力量もある彼女の責任だと、すこぶる気楽ではあった。

昭和四十年当初は、新聞社にもまだまだ女性記者は少なく数えられるほどであったが、そのほとんどの者が一流大学を卒業していた。中岡順子も国立大学の国文科を卒業している、いわゆる才女であった。彼女と組んで単行本の校閲を任されるまでは、席が離れていたので挨拶程度であまり話をしたこともなかったが、席を並べるとなるとそうもいかなくなるし、いずれはこちの人間性も、校閲記者としての資質のなさも一日もしないうちに読まれてしまうだろうと憂鬱でならなかった。

音読も満足にできないうえに誤字脱字をぼろぼろ見逃すような脳なし男がよくも校閲部にきたものだど軽蔑されるだけならまだしも、コンビ替えを部長に申し入れるかもしみにしか聞こえないだろう。なによりありがたいのは、わたしのミスをごっそり訂正したり、そつと指摘してくれる深い見守りかたを示してくれる心遣いを持ち合わせていることだった。だからといって欠点がないわけではなく、自己主張や自意識の抑制にやや欠ける点を彼女らしくもなく、しばしば表に出してしまつて、相手をカチッとさせてしまうことがあった。

そんな中岡順子は、わたしの校閲ぎらい、コンプレックスを徐々に浄化していつてくれたばかりではなく、いつのまにかわたしの心をリズムミカルに弾ませ吸いつけていった。しかもそのきつかけが、彼女のいかにも知的な容姿からは、まったく想像もできない行為なのだから自分でもどうかしているときとあきれてはいるものの、こればかりは、それは邪道だとどんなに自分を戒めても、ジグソーパズルの最後のピースがびたつと嵌まつて完成してしまつたのと同じようなもので、もう崩すわけにはいかないのだ。

彼女とわたしはコンビを組んでから机を並べて仕事をすすめるようになったので、とくべつ意識しなくても彼女の仕事ぶりや仕種、集中している知的な横顔などが目の端に入つてくるときがあるのだが、そのうち彼女には奇妙とも滑稽ともつかない、およそ彼女らしくない妙な癖のあるのを発見したのだ。それは校閲上で明らかに判断しかねた

しれない。どうせこっちは入社できたのが自分でも奇跡として三流私大の文学部卒、プライドなどというものはじめからないに等しいのだ。校閲マンとしてはもつとも不適合、使いものにならない烙印を押されて一日も早く追放されるのを望んでいたわたしは、故意に用語、固有名詞の間違ひを見逃して、さあ、これでも追いつかないのかと理解しがたい歪んだ愉しみかたをしていた。とにかく間違ひがなく当然の校閲という黒子的なけつして脚光を浴びることのない地味な仕事は、生来の単純で見栄っぱりで目立ちたがりやのわたしにとっては、どんなに尽くされても日々がじりじりと煎られるようで苦痛であった。

ところが中岡順子は、想像していたようになわたしを小馬鹿にして淘汰するしたたかな女ではなく、厭味いやみがなく感受性が豊かで判断力にも富んだ、細面のちよつと鬩りのある容貌きようぼうとシャープなスタイルにも恵まれた都会的なセンスの匂いきさけのする仕事熱心な二十八歳であった。しかも、わたしがミスをおかしても、一か所や二か所のミスはだれにでもある、そのための初校、再校、三校、念校、素読みでしよ。それに、大きな声では言えないけれど、責任は最終的にチエックする主任や部長にあるんだからいいのよと笑窪を深く刻むのだが、これも、ミスをしないうえに、自信の裏付けがあるからこそ口のできるのであつて、わたしなどのようなミスの常習犯が言ったのでは、単なる開き直り、負け惜

鉛筆の頭でタイツをはいているとはいへ、やや広げた脚の左内腿を解決がつくまで擦ることだ。はじめのうちはたまにそこが痒いのだろうと思つていたが、それとなく観察していくうちに、そうではなくて迷つていくときの無意識の行為とわかつた。いつのまにか、それを彼女に気づかれないように窃視するスリルがたまらなくなつてしまひ、とくにスカートのときなどは、裾が捲かれて薄いタイツを透かして白い太股のかなり際どいところまで露出させるので、その奥にはどんなものが隠ひそわれているのか、窺つていくのかと、つい窃視にも熱が入つて胸のうちが波打つてくるのだ。彼女の表情はと探ると、心持ち口を開けていかにも女らしい情緒的な横顔に鬩りを浮かべながらも、何かを射止めようとする怖いほど挑戦的な視線を辞書とゲラの間を往復させているのだ。こんなとき机の下で、それが悪戯とも知らずに無邪気に戯れる幼児のように行なつていくエロチックとも見える癖との相違、アンバランスに誘発されて頭の中を他愛のない妄想で、しかも仕事中にチカチカさせ、胸のうちをもやつかせているのだから、ことによらなくともわたしは、自分で考える以上に変質的なおぞましい黒い感情を多分に持つているのかもしれないと、惘然となるのだ。

わたしが二十代半ばのころは好景気を反映して、どの企業も社員同士の親睦をはかる名目での社内旅行が流行とな

り、うちの社でも仕事に支障をきたさない範囲で各部署ごと計画しては年に一度の割で出かけていた。校閲部でもわたしが移ってきた年の秋に一泊で伊豆の網代温泉に出かけた。部員が二十四人なので観光バスではなく電車であった。わたしは、せっかくの休日をつぶしての旅行にあまり意味が持たなくて、以前の部では二回ほど参加しなかったのだが今回の旅行は、そのころには多少なりともわたしのそれまでの校閲アレルギーを取り払ってくれた中岡順子が一緒なのと、彼女のわたしの心を万華鏡にしてくれる癖、行為に魅せられていたばかりか、人間的にも女としてもかなり好きになっていたので積極的に参加したが、その裏には、彼女との間に何かを期待するものがあつたのかもしれない。いや、正直に吐露すれば、あつたのだ。

電車では、生憎と通路を挟んでの席になってしまったので話をする機会はありませんでしたが、彼女が脚を組み変えるたびに赤いフレアスカートフレアの捲れから一瞬のぞく、わたしの視線を矢にする膝裏の白い窪みを見逃さずに、またもそこに性的な匂いを感じて、わくわく心を乱していた。どうしてそうなのか、どういう気持ちのはたらきでそうなるのか考えずともわかっているくせに、けつして白桃のようなむっちりとした股まはら太股、容姿、博識の頭で歩いているような彼女をなんとかしようというのではなく、あくまでも人間性に魅せられているのだと信じたい一方、彼女にそ

とど、たわいもないことを酔い心地の頭の中で転がして苦笑している、

「あーあ、つまらないわあ」

背後で突然、女の声が出た。びっくりして振り向くと、同じ宿の浴衣と絆纏の中岡順子が石を海に投げるところだった。一人のところを見ると、どうやらわたしの後を追ってきたようでもあつたので、予期していなかった彼女の出現に気持ちが張りを得て高揚した。

「どうしたんです。中岡さんらしくありませんね、何か不愉快なこともありましたが」

そう聞いてほしい雰囲気、暗がりにはうつと顔の輪郭を白くにさせながら、二の腕までのぞかせて、風に乱れる肩までの髪を耳に掛ける彼女に感じられたからだ。

「大あり、お見合いをしなさいだって」

彼女らしくもなく蓮っ葉に言つて、また石を拾うと寄せきた波にぶつめた。

「だれがそう言うんですか」

「父と家を継ぐことから逸早く遁走を謀る、ちゃっかりやのわが妹」

「中岡さんは長女ですか、わたしは……」

次男ですと、つい余計を口にしそうになったが、かろうじて声にしないで済ませた。

「見合いに気が進まないと言うことは、すでに心にきめた

の癖を耳打ちすれば、たちまち赤面するか、あるいは怒るか泣き出すかもしれないことへの限りなくすぐりと愉快さ、嗜虐性が邪な愛に化けているのかとも思えるのだ。もつともそこには、どうせ恋や愛は人によってその思いの深淺、エネルギーの程度はまちまちであつて、そこに定型とかレベルとか善し悪しはなく、あるのは、男と女お互いがお互いの心身を一時でもいいから独占したがる本能ただそれだけではないかとする煤けた考えが心の芯の裏側にあつたからかもしれない。

夜の八時半ごろお定まりの宴会がお開きになった。それほど酒はやらなかったが、それでも酔い醒ましに潮風でも吸つてこようと一人旅館を出て近くの海岸までぶらりと散歩に出た。なんとなく甘い気持ちで中岡順子に声をかけようとしたが部屋に引き上げたらしく姿がなかった。

薄曇りなのか、いくつかの星が夜空の底で危なっかしくちらちら光っているほどでしかない月のない暗い海の波は、畝頭うねがしらを白くしながら一定の間隔で砂浜に寄せては扇形に広がり、そして退いていく、どこか人間の日常にも似た単調さを律儀に繰り返していた。人間は何億年も前にこの海から生まれてきたのだ、だから海は永久に万人の母なのだ、海の水がどんなに増えようと地球から一滴としてこぼれたり溢れたりしないわけを、おまえは知っているかな

男性がいるということですか」

カマをかけたつもりでも、ええ、いるわよと受けられたら、きつと嫉妬するに違いないと複雑な気持ちになった足許に寄せてきた波が予想外に勢いがあり、さあつと渚を嘗めてきて踝の上あたりまで襲ってきた。油断を衝かれて慌てて跳び退つたが遅かった。

「あらつ、濡れてしまったんじゃない」

彼女はわたしの足許を透かし見るようにして近づいてきてしゃがみ込むと、浴衣の裾を取つて両手で調べた。

「あらあら、びしょびしょ、絞つてあげるから、じつとしていてね」

浴衣の裾の何箇所かを小さく丸めて絞つた後、そこを広げて両掌で挟んで、パンパンと小気味よく叩いて皺をのばした。胸をざわめかせる女らしさが彼女の背から立ってきた。わたしは小学生に戻つたように故郷の母親を感じてこそばゆいものを胸の奥にしなげら、波明かりにミルク色に浮く細い項うなじから抵抗できない香りが漂ってくるようで、思わず唇を押しつけたい切ない衝動に全身を撫でられた。

「すいません、宿に戻つたら着替えますからもういいです……それよりもまだ、さっきの返事をもらっていませんよね」

立ち上つた彼女の顔は意外なほど目の前に迫つてあつた。その顔をゆつくりと夜空へ向けた。白い喉に、どきつ

と鼓動が鳴った。

「もうすぐ二十九なんだもの、いればとづくに結婚していいでしょうし、見合いをすすめられてもその場で断っているわ。もちろん、過去にはいたけれど、わたしって恋愛べたって言うのかしら、不器用っていうのかしら、生まれながらにして運に見放されやすい質^ちっていうのかよくはわからないけれど、とにかく自分にはそんな気も意志もせんぜんないのに、ふと気がつくといつの間にか相手に去られてしまっているの、これからも自分の間は恋人に出逢えそうにもないから、見合いをしようかどうか迷っているというわけ」

深い溜め息が肩を沈めさせたが、笑みを技巧的に浮かべた横顔には、これまでの自分の人生に抗議しているようでも、あきらめに落ち着きたくないとする焦りのようなものがあった。わたしは目まぐるしく考えた。彼女がなぜ、わたしなどに見合いと過去のような話をしたのかと……もしかすると、わたしの自分に対する関心のほどを探ろうとしているのかもしれない。そう思うと、一途にそれに間違いないような気がしてくるのだ。

「ぼくのこと、どう思います」

聞いてしまつてから、なんて軽率なことをと気持ちが悪かつと陰った。やっぱりおれは酒に酔つている、惑乱している、夜の海のゆつたりと寄せては退く波の催眠にかかつて腰に両腕を回して引き寄せて口づけをした。だが、なんの拒みも硬さもみせないどころか、いかにもそれを予期していたような彼女の受け身の軽さに馴れを感じて、一瞬、誤つたかなと不安、疑念、嫉妬が黒い欠片^{かけら}となって襲つてきたが、もう二十九なのだからと心を広げて思い直した。

その網代での夜を前奏にして中岡順子と恋人同士になつたつものわたしは、到底手の届かない上質な女を手に入れたようで意気があがり、仕事にも多少は欲を出したが、それよりもなにより、同じ部署の社員同士が結婚した場合、どちらか片方が異動になる社の規定なので、どうみても校閲部が出るのは、いや出されるのは自分のほうだと妙な自信を持つてその日のくるのを密かに待ち望んでいたのだが、しばらくして、まったく予想外にも週刊誌編集部への異動の内示が部長からわたしにあったのだ。それは以前の烙印を押されたのかどうかはわからなかったが、彼女はよい機会だからとよろこんで、それとなく近いうちに結婚式をとほのめかしてきたが、わたしは新しい部署での仕事になれるまでは考えられないようなことを言つてその話はおわした。それは内示を知らされた途端に、自分でも自分の心のうちがまったく理解し難いのだが、あれほど肉感的で魅力のあった彼女の内腿にも、疼くような幻想、妄想を掻き立てられなくなったばかりか、下品にさえ感じるように

いる、もう後悔しても追いつかないと、自分の言いさした言葉に怯えたが、こうなつてしまつた以上は、もう彼女の反応を待つて、それによつてうまく、そして適当に対処するしかなかった。

「えっ！ どうつて……」

一瞬、わたしを突き放すようにして正面から深く見守つてから、

「その前にわたしのことは……」

誇りを傷つけられたくない警戒心が咄嗟にはたらいだのだから、少女のように悪戯っぽく小首を傾げてそれを聞いてからでなくては答えられないと切り返してきたのだ。

この利口と狡猾さを巧みに後ろ手に隠して追ってくる彼女から、この場でわたしへの彼女の正直な心のうちを少しでも紡ぎ出すには、軽蔑されようと嘲笑われようと、彼女に対するわたしの気持ちと卑屈にも硬くもならず、正直に告げるしかないと思つた。

「かなり以上に好きになつていと思うんです、嘘ではありません」

ちよつと胸を張つた。

「えつ、まあ、ほんとうに、うれしい、でも、その好きのほどはどのくらいかしら……」

どちらかという口下手なわたしは、いちいち言葉で言うよりはと、その返事の代わりに、大胆にも彼女の浴衣の

なつてしまつたのだ。わたしの彼女への思いは、心身が灼けるような愛でも恋でも愛しさでもなく、仕事への不満からくるストレス解消の異形であつて明らかに実体のない短絡的で安易でほんの一時の男の卑しい貌をした欲望でしかなかつたのだと、百八十度、心の向きが変わつてしまつたのである。

そんな砂漠のように乾いてしまつた心に追いつきをかけられたのは、たまたまわたしの濃紺の背広のボタンが取れかかつていたのに彼女が気づいて、つねにバッグに入れている糸と針で手早く付けてくれたのはいいけれど、コートを着ない季節にもかかわらず、生憎と黒色がなかったのかもしれないが白糸であつたことだ。仕事での外出も来客も鼻白んだわたしは、黒色ボールペンで白い部分を丹念に塗りつぶしたが、「はい、できたわ」と、得意げに笑顔をひらいた彼女の女の部分に懸^かを見た気がして無視できない失望感を味わつたのだ。

それと、たまたまわたしの乗る電車が事故でストップしてしまい、待ち合わせ場所である新宿の喫茶店に一時間以上も遅れてしまつたとき、無聊を持って余しているうちにでも思いついたのだから、彼女が、わたしの顔をやや斜め下から見て、こう言つたのだ。

「ねえ、明日はお休みでしょ、遅れてきたバツとして、こ

れからきみのアパートの部屋を見たいから連れて行ってくれないかしら、いいでしょ、それとも大いに迷惑？」

甘噛みするような媚びとはどこか異なる圧しを含んだ笑みを浮かべて珈琲を啜った。パール色のマニキュアをした細くて白い人差し指の爪の先に赤鉛筆の芯らしき滓がこびりついているのに、なぜか不潔を見てしまったようで気持ちが悪く落ち込んだ。それに時刻はすでに夜の九時を回っているし、アパートまでは電車で三十分はかかるのだ。そんな時間から男の独り住まいの部屋を訪ねたいと言うのだから、その言葉の裏にはそれなりの思惑があるのは明らかだが、不愉快なのは、仮にも恋人であるわたしを、「きみ」と、まるで上司のような呼びかたをしたことである。これまでは顔にも態度にも露さなかったが内心では、ずっとわたしを年齢下というよりも仕事の面でも見下していたからこそ無意識に口に出してしまつたに違いないのだ。この中岡順子という女がこの高慢さを一生持ち続けたとすると、今夜これから、二人が男と女の関係に陥れば、間違ひなくわたしはその副作用と後悔とで懊惱することになるだろう。一気にわたしはうそ寒さをおぼえて、純粹そうにほほ笑んで、余裕を持ってオーケーの返事を待っている彼女に掴まってはならない抵抗の意志を先鋭にした。

「今夜はほかのバツにしてみましたがいまいませんか」

つい下手に出してしまったのがいまいまして面白くなか

息を吹きかけた。すると、これまでの二人の間が、もうこれきりになつても一向に構わないとする心積もりがかなり以前からできていたような気がしてくるのだ。

わたしの顔をまるで詐欺にでも遭つたように穴の開くほど凝視する敵意とシヨックに満ちた彼女の瞳の奥で、思念と心がばらばらになつていく割り切れない翳りの波紋が広がっていた。

「わかつたわ、今夜はきみの望みどおりここでさようならをしてあげる、でも、断つておきますけど、これはあくまでもわたしの意志でなのよ、いい……」

思つたとおり、挑むように目を怒らせてわたしを見下すと、振り返りもしないで雨が降り出したとみえるネオンの街へと喫茶店を出て行った。もしかすると今夜の彼女は、網代の浜で口づけをして以来こつち、同じ職場で毎日顔を合わせていることもあつてデートらしいデートもしていないというえに、キスどころか手の一つも握つてこない男としては積極性に欠けるわたしに目ごころから業を煮やし、不満、不安を抱いていたところに、理由がどうであれ約束の時間から一時間以上も待たされたの苛々が高じて、安っぽい女に扱われているようで思慮を乱してしまい、一時、普段の冷静で柔軟なものの考え方をする彼女らしくもなく恬淡さを失つて愚かになつてしまったのかもしれない。自分

つたが、ここで彼女に心を逆立てさせないためには仕方がなかった。

「あら、そうなの、時間のことならわたしは一向に構わないのに、とても残念だわ。では、今度は反対に今、このわたしに一番なにを望みたいか、どんなことでもいいから正直に聞かせてくれない」

しまいのほうは、やや目を伏せきみにして、しかも声を潜めて言った。このとき、迂闊な返答を与えてはならないと、わたしの頭の中でゼンマイがきりきりと締まつた。

「責任は時間に遅れてしまったこつちにあるけれど、なんとなく気が殺がれてしまったようなので、今夜はこのまま別れませんか」

二人の今後への皺寄せを考えずに言ってしまったのは、彼女のちらつとわたしを見た瞳に、わたしが欲しいんでしょ、無理しないで言ってくれていいのよとの誘いの暈がかかっているようで反発をおぼえたからだ。わたしは、それを精いっぱい小気味よく裏切りたくなくて言ってしまったのだが、そこには、わたしのなかにつね目ごころから男として彼女をとより異性を求める欲望があるのを見破られていたような羞恥隠し、照れ隠しがあつたことはたしかだ。それにしても、私はいつた、この中岡順子とどうなるうとしていいのか、どうしたいのかさっぱりわからなくなつてしまつている粗末な自分に向けて腹の底からの溜め

まま外に出ると、太い雨脚だけが黒いアスファルトで鉤形に跳ねていた。

電車に乗つてもアパートに着いてもベッドに入つても深くへこんでしまつた気持ちの修正がうまくつかずに、彼女とはこれから先、何かと意志の行き違ひが多くなりそうな予感がうねうねと寄せてくるのだ。

その夜から二週間後、わたしは正式に週刊誌編集部に異動となつた。校閲部は五階で週刊誌編集部は三階である。

定時があつてないような不規則なわたしの仕事柄、自然と中岡順子とは顔を合わせない日が多くなつたが、淋しいとか物足りないとか、彼女への思いが抑え切れないなどということはまったくなく、どうやらそれは彼女とて同じらしく、三階には用のない限り顔を見せることはなかった。こうなつてみると、わたしは彼女の淡紅色を帯びていたような癖に妄想をかき立てられた欲望をおぼえ、それを満たさうとしていたのみであり、彼女は彼女で遠く結婚に焦つてとにかく結婚できそうな男に唾をつけようと、愛情など二の次にして求めていたに過ぎないのかもしれない。そして網代の夜の浜で彼女が言った見合いの話はほんの思いつきの罨で、わたしはそうとは知らずに、まんまとその罨に嵌まつてしまったコンプレックス男なのだ。つまり、二人とも一本の糸根さえもない、まったく育つはずのない虚偽の愛をお手玉してただけの、はなはだ軽薄で、人間性に

おいては底の浅い男と女ということになりそうだった。それでも、わたしの中には、当然ながら彼女にすまないことをした後ろめたさは残った。もともと、その後、少なくともわたしは、あのときの彼女との愛に、初めからおしまいまで、はなはだ不真面目で不熱心であってよかったですと心からほっとしてはいるのだが。

二人の書き割のような愛が自然消滅してから二年ほどたち、わたしの中で彼女の白い太股はすっかり形骸化していたころ、社員食堂でたまたま一緒の席になった元の校閲部の主任から彼女が近々結婚式を挙げる話を聞かされた。相手は彼女と同年齢の将来を嘱望されている東大出の政治部記者で、たまたま校閲部にいる同期を訪ねたときに見掛けた中岡順子に一目惚れしたということだった。すでに主任の手許には結婚式の招待状が届いているという。わたしは、もうそんな必要がないのに、なぜか肩の荷を下ろした解放感を味わうと同時に、彼女のためにうれしかった。一目惚れされての結婚ならば、相手の男の彼女への愛は透明で純粹で、彼女も女として本望で、先の知れているわたしなどと結婚しなくてよかったですのである。おそらく彼女もそう思いつつ、長い間待ち望んでいた自分の入っていきける仕合わせの世界を前にして、してやったりの笑みを浮かべているかもしれない。

だろうか。それで構わなかった。

数日の間、彼女の席に行って祝いを述べようか、顔を合わせた折にそれとなくしようかささん迷ったあげく後者にすることにした。それは彼女に、今になってみれば中途半端で終わってよかったのだと断言できる二人のほんの一時のお粗末な愛を思い出させて、幸福の頂上にある彼女を不愉快にさせてはならないと考えたからだ、どうしてこうも世の中には何一つとしてたしかなものがあったてはくれないのだろうか。彼女に祝福の言葉をかける必要がなくなってしまうのだ。

彼女の結婚を知ってわずか一週間後に、これは噂ではなく破談の事実を結婚式の招待状をもらっていた管理課の中岡順子の友人から耳にしたのだ。結婚式の日取りも決まり、社の上司、友人などにも招待状を出してしまっていたのだから、その目を蔽うばかりの悲劇、いや嘘としたい事実は、またたくまに出版局中に広まり、周囲の興味、関心はすぐにその原因に向けられていったが、わたしはプライドの高い彼女が社を辞めるのは仕方がないにしても、自暴自棄に陥って自殺を考えるのではないかと、まさかとしながらも、ずいぶんと心配をしていた。

破談を知ってから二日後、退職するにもしないにしても、どうせ今は欠勤しているだろうから、その間に彼女の様子を校閲部長にでもそれとなく聞こうとして、こっそ

「ところで、きみと中岡くんとは、かなりいいセンって聞いた仲だったはずだろう。いったいどうなってしまったんだい」

いやな口臭を吹きかけながら角張った顔をわたしの耳許に近づけて揶揄する主任に、わたしはムカつときた。

「なにを誤解していたのか知りませんが、仕事を親切に教えてもらっていたそれだけで、わたしはともかくとして、いい仲だったなどとは中岡さんに悪いですよ」

「そうかねえ、実は、部長もほかの部員も二人は近いうちに結婚するんじゃないかと陰で応援しながら愉しみにしていたんだよ」

どうせ応援などではなくて、果たして結末はいかにと野次馬でいたのだろうか、それでも、見抜かれていた羞恥と疚しさで内心うろたえながらもわたしは、

「お生憎さまでした。それにしても、みなさん、かなり暇だったのですね」

精いっぱい皮肉ったが、主任は聞かえない振りやわざとらしくしていた。すでにすっかりしなびてしまっただけで薄な自分の姿が目の端を浮遊した。そんなことはないだろうけれど、彼女にもこの主任が同じような話をしたとすると、おそらく彼女は苦笑しながら、校閲嫌いでセンスのない後輩の教育には、ほとほと手を焼きましたとも応じる

り五階の校閲部に顔を出すと、なんと彼女は仕事をしていたのだ。しかも、堪え難い屈辱にどこまで堪えられるか、その結果に今後の人生を懸けているような哀切な顔をしてである。仕合わせのゴールのテープを切る寸前で躓いてしまった中岡順子の淋しげな背に、網代の浜で彼女が打ち明けた、生まれながらにして運に見放される質なのか、なぜか自分の意志にかかわりなく、気がつくまで恋人に去られていたという過去の恋愛の話を思い出したわたしは、目に見えない運命の巡り合わせの悪さに押しつぶされまいと聞き直って道化女に徹しようとしている痛々しさ、いじらしさ、哀れさ、健気さの陰を見た。

そんな胸を締めつけてくる悲壮な彼女に、とうとう一言の声も掛けられずに部屋を出ようとしたとき、彼女が右手にした赤鉛筆の頭の方ではなく芯の方で黒いタイトスカートの裾をかなりのところまで捲りあげて左脚の内腿をタイトの上からとはいえ小刻みに擦っているのを見てしまった。視線はじつとゲラの上に注いだままだが、明らかに校閲の迷い、悩みではなくて、全身で周囲の好奇と同情の視線を跳ね除けているようにも、現在の自分の立場を客観的に掴もうと焦っているようにも、人生は辛抱と心を噛んでいくようにも感じられるのだが、恐ろしく悲しげな姿に変わりはない。

結局、破談は男側からのもので、これはあくまでも噂の

域を出ないが、彼女の過去に問題があったようだとしかわからなかった。

それ以後の彼女は、一年一年と年齢を重ねるごとに頬、顎、ウエスト、腕に肉をつけていき、それが空回りしているとも知らずに、心の陰影を一ミリとして面に表すまいと自分を偽っているとしたか思えない女になっていたが、実際には胸のうちで拳を振り上げて、わたしのことを含めて、つきつきと裏切っていく男を打撃ちやうちやくしていたのではないだろうか。それとも、いったい、このわたしが何をしようとしようかと嘯うそいていたかもしれない。

わたしは、何とかして一言でいいから、彼女に破談の悪夢を思い出させないですむ慰め、励ましの言葉をかけたかったが、その機会がなく日ばかりがたつてしまつて、とうとう果たせずじまいに終わってしまった。

女として一身分の屈辱と四圍の同情と好奇と冷視と蔑視をへし折つて平然を装いつつ自分を取り戻した彼女は、図書編集部に異動になった後、役付きとなつて六十五歳の定年まで、きっちり勤めとおした。しかも独身であつた。だが、哀れなのは声にも軀つきにも言動にも、仕事を持ち一人で生きることへの過剰な自信が不遜なほど前面に出てしまつていたことだ。ときにそんな彼女と目が合うと、こんな女にだれがしたと、喉元に刃を突きつけられるような後ろめたさをおぼえないでもなかつたが、一時の若さゆえの

がら、網代の夜の海と浜と波をバックに二人で演じたむかししの思い出に帰れなかつたことである。

わたしは、もう一度、中岡順子の死亡記事を読み直した。ほんとうにあの中岡順子は、この世からさつさと暇を取つて逝つてしまつたのか。

JR中央線の国分寺駅から五分ほど乗ったタクシーを降りて、人気のない閑静な住宅街の路を四、五十メートルほど行くとメモしてきた住所があつた。よく手入れの行き届いた庭木、生け垣に囲まれた中に、ベージュ色した古くも新しくもないモルタル壁の落ち着いた二階家が建つていた。おかしなもので、はじめて見るにもかかわらず、あの中岡順子が暮らしていた家ということだろうか、既視をおぼえるのだ。

大谷石の門柱の表札には中岡ではなく「鐫木」とあつたがすぐに、「おくやみ」の記事の中に、喪主は妹の鐫木秋子とあつたのを思い出した。では、「鐫木」というのは、中岡順子の妹の嫁ぎ先の姓で、中岡順子の死後、引越してきたかもしれないし、もともと同居して二つの表札を出していたが、彼女の死で、「中岡」のほうを外したのかもしれない。

表札の横にあるチャイムのボタンを押した。ハイイと中岡順子の声がするよな気がした。だが、いくら耳を澄ま

バカな幻想からさつさと醒めてよかつたと彼女には悪いが安堵している。彼女も同じ気持ちであつたに違ひなく、今になってみれば、それがお互いのための、丸々の正解であつたのだ。

わたしより三年先に定年退職した中岡順子に関してわたしが知っていたことは、大学を卒業した年に母親を亡くし、父親は著書もかなりある国立大学国文科の教授、五歳違いの妹が一人いること、父親の死後、彼女がローンを組んで家を建て直したこと、妹を結婚させたこと、ハワイでの永住を望んでいたこと、五十を過ぎておぼえた麻雀に凝つていたこと、そして、これはあくまでもアルコールが入つたときのジョークだろうけれど、死ぬまでに、もう一度いいから、何もかも忘れさせてくれるブーゲンビリアの鮮やかな紅い花のような無垢でいて身も心も灼けるような恋をするんだとだれかれ構わず言っていたということになる。その相手はわたしでも破談になつた男でもなく、学生当時から、わたしと出逢う前に、おそらくその恋も見えない手によつて尻窄しりすぼまりに終わらされたのだろうけれど、皮肉にもその無垢でいて身も心も灼けるような恋が破談の原因になつてしまつていたのかもしれないのだ。それはともかくとして、たまらなく心残りなのは、静かなバーの片隅か、夜の海を見下ろすラウンジで、お互いの定年を祝いな

しても人の出てくる気配がないので、もう一度押ししてみた。どうやら留守のようであつた。わたしは、なぜかほつとして自分の氣づいた。

それは、定年後の中岡順子の生活がどんなであつたか何でもいいから知っておきたくなつて、香典を手にいささか冷静さを欠いて訪ねてきてしまつたけれど、考えてみれば、彼女の遺影に何を語りかけ、何を詫言、何を惜しめばいいのかわからないのだ。たとえ当時は若かつたとはいへ、不純な動機、張りぼての愛で彼女に甘えかかろうとしていたに過ぎない男が、葬儀をすませてほつとして肉親の前に、在職当時、彼女に世話になつた元同僚ですと、四十九日も一周忌でもないのに、突然、顔を出したのでは迷惑がられないとも限らないし、それに不在なのは、中岡順子の拒絶の意志なのかもしれないのだ。すっかりひるんでしまつたわたしは、手で生け垣の木の葉に触れてから彼女の家の前を離れた。

いつの間にか厚みを増している暗雲からポツリポツリと雨が落ちてきた。わたしは一度だけ振り返つた。無言の道しかなかった。

ことによると中岡順子という女は、自分の知らないうちに引かされてしまつていった紙一重で幸運を得られない運命さだめの籤のままの人生から抜け切れずに、最後まで自分が自分に生きられなかつたのだと、なぜかそんな気がしてならな

くなくなった。

国分寺駅の改札口で、おやっと思わず見直したほど横顔が中岡順子にそっくりな初老の女と擦れ違った。もしやと声を掛けようとしたが、なぜか臆してそれはできなかった。

人影の疎らなホームに出ると白い雨が音を立てて降っていた。その雨の簾の奥に、遠いむかしの網代での夜の中岡順子が過ぎった。

その夜、わたしは社報の彼女の六行の死亡記事を銚で切り取って微細に刻んでチリにしたものを小紙に包んで散歩に出た。雨は上がって霞のような雲が流れていた。わたしは公園のベンチに掛けて風を待った。背後で櫻の木の葉がざわめいた。わたしは右掌の上で小紙を広げて、チリを風



受賞の言葉

星野 透

二〇一一年の成果は、ある文学賞の最終候補作品に残った二つで終わりかと、ほとんどあきらめかけていたところへの知らせでしたので、ほっとしました。

実は、前回（第七回）は、第3次通過どまりでしたので、今回もそこまでかもしれないとしていたのです。

ところが、おかしなもので、優秀賞の連絡をいただいた途端に、当選ではなかったのかと失望するのですから勝手なものです。

わたしの作品は、どうも人間性に関して、いま一も、いま二も描けていない感じがしてなりません。今後はその点に力を注がなくてはと反省はしているものの、近ごろ、小

我が国には再びない中国北京での
少年の目から見た植民地生活の反省と回顧録

蘆溝橋

定価 1300 円 (送料込)

東山昇 著 遠足の頃 千葉日報社刊

注文先 アジア文化社 ※御希望の方はアジア文化社に御連絡下さい。

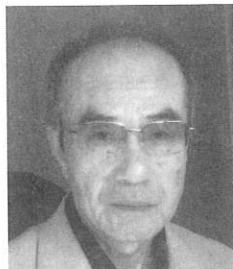
〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

説を何のために書いているのか作家でもないのに一人前に分からなくなるときがあるのです。今更なんだとあきれてはいても、その疑問はいつも後をつけてくるのです。書き始めた動機は、子どもに読んでもらいたい、わたしの存在を活字に残しておきたいからでしたが、こころ、二年は、応募することで満足してしまっているつまらないところがあって、不満でなりません。

でも、やめる気は毛頭ないので、無心になって、もう少しの間つづけていこうと思いつけておりますが、それから、頭の体操のつもりでつづけている、毎日一時間、読書も、可能な限り守っていくつもりです。

おしまいになりましたが、選考委員の皆さまに読んでいただけたことに心から感謝いたします。



星野 透 ほしの とおる

1938 静岡県浜松市に生まれる
埼玉県所沢市在住
新聞社に勤務、定年退職

主な受賞歴
1907 第4回USEN朗読文学賞(放送)
2009 第6回奥の細道文学賞
第1回河林満賞

蕎麦の花

神通明美

どこから呪文のようなものが聞こえてくる。

三輪は驚いて、目を開けようとした。ところが、どうしたことか眼が重く、思うように開けられない。それでも、できるだけ目の周りの筋肉に力を込めるようにして瞳を凝らしていると、やがて、霧が立ち込めているかのような、ほの白い空が見えた。切れ目から、その後ろにある、深い闇の色を覗かせて。

——もしかしたら、あの闇は冥土で、俺は今、そこへ連れて行かれようとしているのかもしれない。いやだ。俺は、まだそんなところへ行きたくない。俺にはもう少しやりたことがあるのだから。連れて行かれないようにするためには、何でもいい、縄すがれるものを探さなければ。

三輪は、白い天井や壁に目をやり、だれにもなく聞いた。いや、聞いたつもりだが、思うように口が開かなかつた気がするから、声はあまり出ていなかったかもしれない。それでも、そばにいる人間には、三輪の尋ねていることがわかったようであった。

「ああ、ここ？　ここは市民病院」
妻が涙声で答え、そのあとを営業課長が引き取るようにして言った。

「対向車を運転していた人は、すぐに救急車で大学病院に搬送されたそうです。しかし、部長は救出されるのに時間がかかったものだから、大学病院のベッドが塞がってしまい、ここに搬送されたということです」

「……そうか。そんなに時間が？」
「はい。対向車が部長の車の上に乗り上げていて、ドアが開かなかつたそうです。それでレスキュー隊に来てもらい、カッターで切って救出したと」

——そうか。レスキュー隊まで……。
夢うつつではあったが、少しずつ、自分がどうしてそこにそのような状態であるかがわかってきた。

「……何時だ？」
「えっ？　ああ、今ですか？　今は夜の十一時ですが」

——夜の十一時。ということは、会社を出発したのが午後の一時半過ぎで、あの葡萄園近くまでは三十分ぐらいで

そう思い、宙に手を伸ばそうとすると、その手を掴むものがあり、足もとから黒い影が競り上がった。目を凝らすと妻で、その横には母が、後ろには部下の営業課長が心配そうな顔をして立っている。

「ああ、あなた、気がついたのね。よかった。よかったわ」
妻が感極まったような声で言い、三輪の足もとに突っ伏した。母は、胸の前で合わせた手を前後に細かく揺すりながら、溢れ出る涙も拭わず、ぶつぶつ呟いている。

三輪は何が何やらわからず、体を起こそうとした。ところが、なぜか、体の自由が利かない。頭を上げて左右を見ると、両手、両足が四方から引つ張られていた。

「……ここは？」

行けたはずだから、八時間か九時間、俺は意識を失っていたということか……。

朝、出勤してからのことが少しずつ思い出されてきた。

その朝、三輪が会社に出勤すると、部下の一人が休んでいた。女性事務員の話では、五分くらい前に本人から電話で、風邪を引いたのか熱があるので休むという連絡があったという。

その男は、この春に採用されて三輪が部長を務める営業部の配属となったのだが、二十代後半半というのに覇気がなく、仕事のミスも多くて、三輪は内心、困っていた。一週間前にも砺波市となみにある大手の卸売業者から、注文していたものとは別の薬が納品されたということでクレームがきており、今日はその業者のところへ、三輪と二人で詫びに行くことになっていた。

——彼のミスで出てきた仕事なのに休むとは、なんと無責任な！　熱が出たというのも、もしかしたら作り話かもしれない。

すぐにも電話をして真偽を確かめようかと思った。それで嘘とわかれば出勤させて、どうしても連れて行かなければならない。

しかし、間もなく、電話をしても無駄だと思ひ直した。確かめても嘘と認めるはずはなく、出てこいと言っても、

出掛ける時刻までには来ないような気がした。

結局、自分一人で行くことにして、出発前に念のため、濃いコーヒーを飲んだ。数年前、ということは五十の坂を越えたところからだが、昼食後一時間ほどすると決まって眠気がくるようになった。それで、その時間帯にはなるべく運転しないようにしているのだが、この件については三時に伺いますと昨日のうちに向こうに連絡を入れてあることや、用件が用件であるだけに変更するわけにいかない、と三輪は思った。

富山市街を抜けて三五九号線を行くと、間もなく道は登り坂になった。窓の外を流れる色も、コンクリートの灰色やガラスの眩い反射光から、田や畑や山林などの濃い緑に変わり、疲れていた目も心も、少しずつではあるが潤いを取り戻していくような気がした。

長い登り坂のあとにはカーブの多い下り坂が続く。スピードを落とし対向車に気をつけながら、三輪は思っていた。——子供たちが小さかったころは、たびたび、この道を走った。長男がカブトムシに興味を持っていたころは、その幼虫をもらおうと、この右手奥にある自然博物館まで行くために。長女が歩けるようになる、自転車や滑り台で遊ばせようと、その隣にある「いこいの村」に行くために。

そして、登り坂になると、今度はアクセルを踏みながら思っていた。——二人が小学生のころは、この坂を登り、

も言わなかった。面会謝絶を解かれてはいたが、息をするのもやっとで、ものを言う気力がなかったのだ。それに、そのときはまだ、どうしてこのような目に遭わなければならぬのかと、自分自身の運命を恨み、天を呪う気持ちのほうが強くて、相手に対してどうのこうのと思う、そこまでの精神的余裕はなかったような気がする。

ベッドに体を横たえているだけでも大変なのに、入院直後から、手の血管が出なくなると今度は足からというふうになり、引っこりなしの点滴注射を三輪は受けなければならなかった。

白い天井を見上げながら彼は思った。

——俺は果たして本当に生きられるのだろうか。

——こんなひどい思いをするくらいなら、死んだほうがましだ。

ところが、一週間もすると肺からの出血も止まったというところで、レントゲン撮影が始まった。

被爆量のほうは大丈夫なのかと心配になるほど多くの写真を撮られて、その結果告げられたのは、左右の下顎骨と鼻の骨、右の鎖骨と左の上腕骨、そして右膝の皿と、この六カ所で骨折しているということであった。

——俺の人生は、もう終わった。

残っていた気力の糸も断ち切られた気がして、三輪は白

もう少し砺波寄りにある葡萄園で葡萄狩りをしたり、パーベキューをした。そう。確か、この坂を登り切った辺りにある葡萄園だった……。

そのときだった。峠の山陰から現れた黒の乗用車が、対向車線ではなく、なぜか中央ラインを越えて突進してきた。

——なんだ。これは！

慌ててハンドルを左に切った。が、時すでに遅かった。フロントガラスの上へその車が覆い被さってきたかと思うと、目の前が真っ暗になり、そのあとのことは、もう、何も覚えていない。

対向車を運転していたのは、数年前に公務員を定年退職した男だった。歴史や文学を勉強したいということで富山大学のオープン・クラスを受講しており、その日も大学へ向かうところであったという。ところが、床に落ちたCDを拾おうとしてハンドル操作を誤り、センターラインを越えてしまった。

「百パーセントこちらが悪いのだと主人も申ししております。ですから、本当は主人が謝りに来なければいけないのですが、何分にも脊髄をやられていまして、今も全く動けない状態ですので……。本当に申し訳ございませんでした」

その男の妻はそう言って平謝りに謝り、さらにそのあと息子を連れて見舞いに来たが、三輪は特に恨み言も嫌味

い天井を見上げた。

——そんなにも多くの箇所で骨折しているのでは、たとえ骨がなくなつたとしても職場復帰など無理だろう。いや、それだけでなく、定年後にやりたいと思っていたこともやれないかもしれない。

三輪は、五十歳を過ぎたころから、数年後に迎える定年を楽しみにしていた。さらにその上の地位を望んで働き続ける人もいるだろうが、彼はそれ以上働こうとは思わなかった。三十数年間、職場に拘束されて、やりたいこともやらずに我慢してきたのだ。子供も独立したことだし、残る時間はできるだけ自分のために使いたいと思っていた。例えば、仕事のために中断した水墨画を、もう一度先生について一から勉強したかった。二十代後半より作ってきた俳句から三百句ぐらいを選んで第一句集を出版することも考えていた。子供たちに本を読んでやるとか、目の不自由な人のために名著をテープに吹き込むとか、自分に合ったボランティアを探して、少しぐらいは社会貢献をしなければ、とも思っていた。

——それなのに、このあとずっと他人に介助されて無為にベッドの上で過ごすことになるとしたら？ それでは生きていく意味がない。そんなふうにして過ごすくらいなら、あの世へ行つたほうがいい。

面会謝絶が解かれると、会社の人や高校や大学の友人な

ど、多くの人が見舞いに来た。しかし、三輪は少しもうれしいとは思わなかった。むしろ、情けない姿を見られたと思うと、心はずたずたになり、ブライドを踏みじられた思いで、

——あの窓から飛び下りたら一氣に楽になれるかもしれない。

——点滴の針を外し、何も胃に入れないでいたら、徐々に衰弱して、あの世へ行けるのではなからうか。

などと、マイナスの方向へばかり心が向くのだった。けれども、いくらそう思っても、ベッドに縛りつけられ、独りで車椅子に乗ることさえできない体では、どうすることもできない。

しかたなく、波打ち際に打ち上げられた流木のように心も体も投げ出して、六カ所すべての手術を受けたのだが、なにしろそれだけの数の手術である、どのような順序で受けたのかは覚えていない。ただ、最後にやったのが顎の手術であったことだけは、その後が大変だったから、はっきりと覚えている。噛み合わせが悪くならないように上下の顎をワイヤーで縛って固定するという手術だったのだが、固まるまで四、五十日間、動かしてはいけないということ、金具を装着され、食事は流動食になり、話すことを全く禁じられた。しかし、四六時中そのような状態していると、十日目ぐらいから頭の天辺がキリキリ痛み、夜も昼も眠る

ンチぐらいの透明な石は、それから五年たった今も時々どこから出てきて、自分の痛い膝に翳したりしている。そうしたところを見ると、いまだに抜けられないでいるように、女は多分、その宗教団体の地方の幹部なのだろう。三輪は腹の上に置いてあったホワイトボードとマジックペンを取った。そして、まだ力の入らない手で「やめてくれ。この女、すぐに外に出してくれ」と書き殴ると、それを母に示して女を追い出した。

三輪には、母がそうした人間を連れてくる気持ちがわからないわけではない。妻から聞いた話では、母は病院に駆けつけたとき、半狂乱の状態だったという。絶望的な声を上げてベッドのそばで泣き崩れ、息子を助けてくれと言った。医者の手を離さなかったそうだ。すべての箇所ですべて成功したと聞いてからは、安堵したのか、静かに三輪の横に座っているが、それでも、時々ふっとまた心配になるのか、三輪の眠っているときにそっとその石を翳したりしている。

三輪は初めのころは、それに気がつくとも、声を荒らげて母に言った。

「そんな非科学的なことでは治るわけがないだろう」
しかし、今は、母だけなら、目を瞑って気がつかない振りをしている。それほど言われてもやめようと思わない母の気持ちを見ると、不憫でならないからだ。

ことができなくなつた。そのために頭は常に朦朧としており、廊下の向こうからやって来る人がナイフを持っている通り魔のように見えたり、病室の隅に黒い服を着た男が身を潜めてこちらを窺っているように思えたりした。

顔の上で光と影が揺れ動いている。

木漏れ日かと思ひ、目を開けてみると、母と見知らぬ女が三輪のベッドの横に立っていた。女は頬が青白く、目がつり上がっていた。痩せた体を黒っぽい服で包み、右手には直径が三センチぐらいの透明な石を握っている。

女は、その石を三輪の鼻の上に翳し、左手を口の前にヨットの帆のように立てて、何やらぶつぶつ呟いていた。それから、その石をさらに三輪の右の鎖骨の上や左腕のほうに移すと、再び同じことをした。

三輪は、女から目を外し、その後ろにいる母を見た。母は、日に焼けて皺だらけになった手を胸の前で合わせて、これも何やら眩きながら繰り返し頭を下げていた。

女は、母が連れてきたものと思われた。母はいつのころからか、新しい宗教団体の集まりに通うようになった。父と兄が相次いで病死し、兄嫁が子供を連れて家を出てしまったところからかもしれない。叱りつけ、そんな団体、すぐに抜けろと言うと、風呂場の入り口にぶら下げていたお守りのようなものはどこかへ隠してしまつたが、直径が二セ

手術をして骨の接合がうまくいっていることが確認されると、次はリハビリということになった。

しかし、三輪はあまり熱心にそれをやろうと思わなかった。初めは硬直した筋肉をほぐすことから始まつたが、痛くて、思わず悲鳴を上げてしまった。そのあと器械を使って膝を曲げたり腕を上げたりする訓練をさせられたが、そのときは痛みだけでなく、そのへんの骨が外れるのではないかという恐怖を覚えた。そのような痛みに耐え恐怖を覚えながらやつたところで、どうせ元の体には戻らないのだろう、それならそんなに熱心にやることはない、そう考えていたからだ。

車椅子でリハビリ室へ通うのも気が進まなかった。入院後一か月余りで三輪の体重は十五キロも落ちてしまった。食欲がなかったし、一時期、死を望んで食べることを拒否していたからだ。そのように痩せた体に病院から貸与された白地の木綿のパジャマを着ると、まるで幽霊で、自分自身、目を背けてしまう。それなのに、さらに顎には金具を、背には、肩が動かないように背負子しよこのようなものを装着して行かなければならない。廊下やエレベーターの中で人からじろじろと、あるいはためらいがちに見られたりすると、恥ずかしくて惨めで、

「何を見ている。俺は見せ物じゃない」

と、怒鳴り散らしたい衝動に駆られるのだった。

あれは入院して一か月ぐらいたったところのことだ。リハビリを終えて病室に戻り、車椅子に乗ったまま窓の外を見ていると、だれかがドアを開けたような気配がした。だれだろう。振り返ると、三歳か四歳ぐらいの男の子で、中を窺うようにしながらそろりそろりと病室の中へ入ってきた。

三輪は車椅子の向きを変え、目で笑いながら彼を手招きした。孫に近い年齢だったから親しみを覚えたのだ。

ところが男の子は、それまで三輪が目に入っていないかっただのか、びくっと体を震わせて立ち止まると、三輪をじいっと見入った。そして、苦笑いすると、首を横に振りながら後ずさりをしていき、ドアのそばまで行くと、

「きゃあ」

と叫んで廊下へ走り出ていった。

三輪はしばらくの間、何が何やらわからず呆然としていた。しかし、彼を既にエレベーター付近で見ていることや、彼がいやに派手な声を上げながら逃げていったことなどを思い出したり考えたりしているうちに、彼の行動の意味がわかってきた。

その子は、三輪がエレベーターを降りたときから三輪のあとをつけていた。そして、もう一度自分が目にした怪物

のサイレンを聞いたびに事故当時のことが思い出され、傷口が痛むのも、やりきれなかった。

夕方、決まったように、病院の空にカラスの群れが来て飛び回るのを見るのも、死期の迫っている人がここにいるよ、と知らされているようで気が滅入った。

冬が深くなると廊下の暗さや静けさが身に沁みるようになり、夜など、牢獄にでも監禁されているような気がして、逃げ出したくなった。

「こんなところにこれ以上いると気が狂ってしまう」

そう言っただけで自分から希望して退院したのだが、行つた先は、妻と二人で暮らしていたマンションではなく、そこから車で五分ほどで行ける、母の住む実家だった。妻はデパート勤務で帰りが遅く、まだ手数のかかる三輪の面倒を見ることができなかった。そこで母に食事の世話や排泄の介助などをしてもらうことにしたのだ。

実家で、妻と母とで用意してくれた電動ベッドに横になると、三輪は思わず号泣した。病院にいた間に積み積もっていた怒り、悲しみ、不満、恐怖などが一気に噴き出した感じだった。そのあとは、ほとんど飲まず食わずで、眠れるだけ眠った。病院では体温測定のリハビリに行く時間だのといったたび起こされ、なかなかすつきりとは眠れなかった。見舞い客が来ると気を遣ったし、医者や看護師の応対が気に入らないと苛々して、身も心もへとへと

を見てみようと、病室まで入ってきたのであった。

惨めさ、怒り、絶望感、さらに、ありとあらゆるものに對する憎悪のような感情までがない交ぜになって、みぞおちの辺りから喉もとへ突き上げた。キーンと耳鳴りがし、頭が痛む。

三輪は車椅子のブレーキを外すと、男の子が出ていったドアに向かって力の限り車椅子を走らせた。そのようにしてドアに体ごとぶついたら、その衝撃で死ぬるかもしれないと思ひながら。しかし、それでもまだ生きていることを知ると、今度は廊下に出て、突き当たりの窓に向かって突進した。窓ガラスを割って、そのまま建物の外へ飛び出すことを望みながら。

入院して六か月後、三輪は退院した。

医者からそうしてもよい言われたわけではない。相変わらず膝も腕も思うようには動かさず、体全体が重くてしかたがなかった。それでも、自分から望んで退院したのである。

理由は、車椅子に乗ったままドアや窓に体当たりするという、端からは狂ったとしか思えない行動をしたときから、医者や看護師の自分に対する態度が急に冷たくなったように思え、人間として扱われていないという不満を覚えることが多くなったからだ。

総合病院なので日に何回となく救急車が来るのだが、そ

に疲れていた。

目を覚ますと、妻か母の気遣いなのだろう、枕もとに日本経済新聞と地方紙が置かれていた。しかし、久し振りにそれらのページをめくってみたら、あれほど関心のあつた政治や経済も自分とは関係のない世界に思え、社会面の記事にも特に興味を覚えなかった。

——こんなふうに関心なくなるとは、生きていてもしょうがないのかもしれない。

——自分が母の介助をすべきなのに、これでは逆じゃないか。母にも世の中にも申し訳ない。

またまたマイナスの方向へ心が向くようになり、ふつと、あの世へ行きたくなった。しかし、母の部屋から持ち出して自分のベッドの下に隠しておいた電気コードやナイフを手にとってみても、いざ踏み切ろうとすると、その勇気が出ない。

——なんと意気地なしなんだ！ おまえ、それでも、男か？ 三輪は自分に向かって吐き捨てるように言った。そして妻と母を呼ぶと、有無を言わせぬ口調で言った。

「これからは、だれが訪ねてきても、いないと言ってくれ。ああ、そうだ、医者へ行っていると行ってくれればいい。それから、電話も取り次がないでほしいんだが。寝ているとか出掛けているとか、適当に理由をつけて」

このときを限りに他人とは口を利かず、社会と断絶して

生きようと決心したのだった。

雪を被って白くくつきりと聳えていた立山連峰も、七月末になり雪が消えると、稜線が和らぎ、青く霞み始めた。三輪が退院してから一年半になろうとしていた。しかし彼は、週に一度妻の運転する車でリハビリに通うほかは、ずっと家の中に閉じ籠もっていた。体のほうは幾分か力がついてきていたが、心のほうが浮上しないのだった。ベッドの上でうつらうつらしていると、インタホンが鳴った。母は、整形外科病院のバスで腰や膝の治療に出掛けている。

出たくないので放っておくと、今度は「ごめんください」と、女の声が出た。そのあと立ち去っていった様子がなのは、遠方から来たか、急ぎの用があるのかもしれない。しぶしぶ杖を突きながら出ていくと、玄関先に一人の女が立っていた。目が痛くなるほど眩しい田の緑を背にして、白いドレスを着て立っている。

だれだろう。目を細めてよく見ると、黒く大きな目、ぼつりとしていて柔らかな唇……。たしかニューヨークにいるはずの藤川詩織だった。

三輪は思わず二、三步、後ずさりしていた。杖を使っている姿など見られたくないと思ったのだ。しかし、既に見られていては、どうすることもできない。しかたなくその

「いや、忘れちゃいない。ただ、あまりにも突然だから……。だけど、驚いたなあ。昔とちつとも変わらない」

「そうですか？ そんなことはないでしょう。だって、あれからも十年ですよ」

「そうか。もうそんなになるのか。で、また富山に帰ってきたって？」

「ええ。ですから、また、句会でお会いできますよね」

「えっ。ああ、句会か。……そうだな。しかし、まだこんな状態だからね」

「大丈夫ですよ。吟行が無理なら、県民会館の句会に出席するとか、それも大変なら投句からお始めになるとかすれば」

「そうか。そうだよ。県民会館くらいなら出席できるかもしれない」

いつの間にやら詩織のペースに乗せられて、積極的になっている自分に三輪自身、驚いたが、久し振りに心の雲が晴れたような気分だった。

詩織はそのようにして十分ほど話していただろうか。「ああ、あまりお話ししているとお疲れになるわね」と言うのと、抱いていた見舞いのアレンジメントフラワーを三輪に渡し、「じゃあ、約束ですよ、近いうちに必ず句会に参加なさること。皆さんにもそうお話ししておきますからね」と言って何度も振り返りながら去っていった。

場に突っ立っていると、詩織は言った。

「ああ、よかった、お目にかかれて。病院では、そのような方、現在入院しておられませんが、の一点張りだし、マンションをお訪ねしてもいつもお留守で。でも、管理人の方に事情を説明して住所を教えてほしいとお願したら、ここを教えてください……」

ふわっと人の心を包み込むような、あの声だった。そして、「実は五年前に帰国して東京にいたんですよ。俳句の会のほうにはお知らせしていませんでした。で、今度また富山に帰ってきたんで、久し振りに句会に出てみたら、三輪さん大変だったのよ、って、あれはどなたかしら、教えてください。そんなに遅くなって」と言う。その話し方も、ゆつたりしていて昔と少しも変わらなかった。

三輪はただ、目を大きく見開いて詩織を見ていた。何かを言わなければと思うのだが、胸の辺りに何かがつかえていて、なかなか言葉が出ないのだ。それでも詩織の話がそこで途切れると、

「だれかと思えば、詩織さんじゃないか」

初めて気がついたかのように、それだけは言った。言ったあとすぐに、身内の者以外とは口を利くまいと心に決めていたのに、と気がつき、心の中で苦笑したが……。

「そうです。詩織です。お忘れになってました？」

詩織の姿が見えなくなると、三輪は彼女が持ってきてくれた花をベッドからよく見える出窓に飾った。そして、ベッドに横たわり、黄色の薔薇にかすみ草などを添わせたその花を眺めて、詩織が、「だけど、三輪さんのように何も悪いことをなさらない方がどうしてそのようなひどい目に……。……」と言ってハンカチで目もとを押さえていたことや、「でも、もう大丈夫。私が帰ってきたから」と冗談っぽく言って微笑んでいたこと、句会で会おうと誘ってくれたことなどを思い返していた。すると、どういふことだろう、——生きていると人間、このように良いこともあるんだ。ふと、そうした言葉が頭に浮かんだ。そしてさらに思った。

——だったら、もう少し生きてみようか。

驚きであった。ほかのだれが訪ねてきてくれても、そして、どんなに温かい言葉で励ましてくれようと、一度も頭に浮かばなかった言葉である。それなのに、詩織が来てくれただけでそのように思うとは。三輪自身わからない心の動きであった。

詩織とは、三輪が加盟していた俳句結社の富山支部の月一回の句会で知り合った。大学でも一応サークルに入っている俳句は作っていたのだが、卒業後も続けたいと思い、入会の申込みをしたのだという。

三輪より十八歳も年下だったが、社中では三輪が一番若かったせいも、吟行のときも気がつくくと、よく横を歩いてた。

そのうち、二人だけでお茶を飲んだり、俳句の材料を探して日帰りのドライブもするようになった。妻が土日でも出勤することが多く、あまり気兼ねせずに出掛けることができたのだ。話題はどちらかというと、俳句に関するものが多かった。誰のどういう句が好きだとか、この季節には何という季語が使えるとか、どういう本を読むといい、といった話である。そんなとき、ふと気がつくと、彼女が大きな目で自分を見入っていたりして、心が揺れることもあったが、三輪はいつの場合も気づかない振りをしてた。話している心が弾み、若返る気もしたが、肩に手を振れたことも手を握ったこともない。

妻を裏切ることとはできないと思ったからだろうか。確かにそういうことも心の隅では思っていたかもしれない。しかし、それよりも、少しでも触れると大切にしたい何か崩れてしまいうので、それ以上踏み出せなかったという理由のほうが大きいような気がする。

とにかく彼女に対する思いには封印をして兄のように接していたのだが、五年目、彼女から縁談についての相談があった。彼女が勤務する会社の上司が持ってきた縁談で、相手は同じ会社のニューヨーク支店に勤める男だということ

とだった。

そんな話、やめておけよ。

三輪はできれば、そう言いたかった。しかし、それじゃ彼女の人生に責任が持てるのかと自分に問いかけると、イエスと自信を持って答えることはできなかった。結局、「うーん。それは詩織さん自身が決めることで、僕がどうこう言うことじゃないよ」

素っ気なく答えて本心は胸の奥深く納めていると、九月の半ば、詩織から電話があった。

「今月締切りの句が全然できなくて困ってるの。それで利賀村にでも連れて行ってもらえないかと思って……。蕎麦の花がきれいだと、つい最近の新聞に出ていたし……」

半月後には挙式だというのに、そんな悠長なことをしてよいのだろうか。一瞬そう思ったが、彼女からそんなふうに頼まれるのも最後だと思つてやりたくなくなった。蕎麦は、ちょうど花盛りであった。畑一面に咲く様は、緑の野の上につつすらと雪が降り積もったようで、清々しいが、どこか儂さを感じさせた。しかし、道から畦へ下りて屈んで観察すると、赤く細い茎も、柔らかい緑の葉も、その上に集まるように咲く白い小花も、無駄や虚飾を省いた強さ、美しさを感じさせた。

手折ることもためらわせる清らかさだ。

ると、

「もう少しだけ一緒にいたい」

詩織がぼつりと言った。

驚き、心が揺らいだが、挙式を控えて感傷的になつていふのだらうと思ひ、「そうか。じゃ、どこか近くでコーヒーでも飲むか」と言つて、再び車を発進させようとする、ハンドルを持つ三輪の左手に詩織の手が触れてきた。ためらいがちにゆつくりと、細く白い指先で。しかし、それはほんの一瞬で、三輪が彼女のほうへ振り向いたときには、既にその指はするりと引かれていて、彼女は涙の目で三輪を見たかと思うと、「さようなら」と言つてスカートの裾を翻しながらアパートのほうへ走り去つていった……。

それだけである。そして、それっきり詩織とは会つていない。それなのに彼女が現れた途端あれほど沈み込んでいた心がふわりと浮上したのは、一体どういふことだろう。

翌朝、眠りから覚めた三輪が水を飲むとうと台所へ行く、母が畑へ行く準備をしていた。ブラウスとズボンの上に割烹着を着けて、タオルを首にかけ、麦わら帽子を被っている。

「おれも行こうか」

三輪は言った。言つたあとで三輪自身啞然としたが、問

一瞬、三輪の脳裏をそんな言葉が過つた。すると、なぜか詩織のことが頭に浮かび、いつの間にか自分のそばを離れて視界に入らなくなつてた詩織のことが心配になつた。

ゆつくりと立ち上がり、目でその姿を探すと、詩織は、蕎麦の花が茫茫と咲き広がる、その向こうの道に立つて、風に靡く髪を指で掻き上げながら、ノートに何やら書きつけている。

あの様子では、既にもう、満足できる句が何句か作れたのかもしれない。だったら俺も負けずに作らなければ。

そう思い、再び目を蕎麦畑のほうへ落とすと、一筋の風が山のほうから吹いてきて蕎麦の花をドミノ倒しのように大きく波打たせた。すると、その波に驚いたかのように花の中から白い蝶が二匹、ふわりと舞い上がり、風の中で幾度も纏れたかと思うと、再びそのまま花の中に沈んでいった……。

夕明かりがまだ残るころ、富山に戻り、その足で寿司屋に行った。フランス料理でもと思わないではなかったが、ニューヨークに行けばしばらく寿司は口にできないだろうと思つたのと、できるだけ向き合えないほうがよいと思ひ、寿司屋のカウンターに座つたのだ。

それから、詩織のアパートの近くまで送つていった。車のドアを開けて彼女が助手席から降りるのを待つてい

もなく、詩織が訪ねてきてくれたことが、自分にそんなことを言わせたのだろうと気づいた。

そのまま母の答えを待っていると、母はなおのことびくりにしたらしい。腰を伸ばしてまじまじと彼を見ていたが、「そうかい」

と言うと、物置から新しい麦わら帽子と長靴を持ってきて、

「じゃ、これを着けるといい」

と、三輪に渡した。

それらを身に着けて、杖を突きながら母のあとについて家を出ると、ひんやりとした風が優しく頬を撫でた。

——ああ、なんと心地よい風なんだろう！

三輪は生まれて初めて、そのように爽やかな風を知った気がした。退院してから一年半、ほとんど家の中に閉じ籠もっていたので、よけい新鮮に感じたのかもしれない。

歩きながら遠くへ視線を延ばすと、太陽は既に立山連峰の稜線よりかなり高いところに昇っていた。けれども、空にはまだ黄色が残っており、そこを数羽の鳥が誘い合うように南へ向かって飛んでいた。虫の音に気がついて道の脇へ目を落とすと、えのころ草の穂に朝露が光り、それが群生する、そのところどころに、露草の瑠璃色や赤まんまの薄紅色が覗いている。

畑に行くと、そこにも、茄子、オクラ、つる豆などの花

しまい、休職扱いにしてくれている会社にも復帰できるような気がしてきた。

家にいるときは努めて歳時記を手にし、俳句を作ることにした。詩織が言ってくれたのか、結社の支部のほうから月例会の結果がまとめて一年分届いた。それを読んでみると次第にリズム感も戻ってきて、毎日一、二句は作れるようになった。

お盆過ぎ、三輪はふと思いついて、畑の横の荒地地の草むしりをした。もとは畑であったのだが、母一人では手に負えず放置してあった土地だ。そのあと耕耘機で土を起し、そこに蕎麦の種を撒いた。それが芽を出し、赤い茎で立ち、白い花をつけるころ、三輪は句会に出たいこうと思つた。そして、できれば蕎麦の花の句を提出したかった。

八月の句会の結果を知らせる会報には、詩織の句として、蕎麦の花の句が一句掲載されていた。

絡み合ひ落ちゆく蝶や蕎麦の花

が露を抱いて咲いていた。それらを見つめ、穂の出た稲田やその向こうに青く聳える峰々を眺めながら三輪はつくづく思うのだった。

——外に出れば、このように美しい世界があったのだ。それなのに、俺はそれを見ようともせず、二年もの間、閉じ籠もっていた。なんとひねくれ者で、意地っ張りだったんだろう。

その日は、母から絶対に無理をしないようにとうるさく言われ、自分でも怖かったから、屈まなくてもやれる茄子とトマトの収穫を十分ばかり手伝っただけだった。しかし、鬱々としていた心もいつの間にか晴れていて、永遠に続くかに見えた長いトンネルも、かすかに出口が見えてきたような気がした。

それからは、雨が降っていないときはほとんど毎朝、三輪は母と一緒に畑に出た。屈むとまだやはり痛みがあつて腕にも力は入らなかつたが、少しずつ時間を延ばしながら、草むしりや耕すこともした。そうしていると、曲がらなかつた膝も少しずつ曲がるようになり、腕にも次第に力がついてきた。それに、日がな一日、部屋に閉じ籠もり、無為に過ごしていると、どうしても自分の体のほうに気が行つてしまし、社会との断絶だとか死にたいなどと、ぼかなことも考えたりするのだが、母と一緒に畑に出て汗を流しながら収穫や種蒔きをしていると、体の痛みなど忘れて

作家集団「塊」メンバー募集

作家集団「塊」は、文芸思潮および銀華文学賞・まほろば賞などを通じて、新たな表現運動を展開する作家集団です。

河林満の逝去により、欠員が出ましたので、新メンバーを募集します。

「文芸界」「群像」「新潮」「すばる」など新人賞またはそれに準ずる受賞経験者で、現在の文学状況を打破したい気鋭の作家の参加を期待しています。

参加を希望の方は「文芸思潮」内・作家集団「塊」事務局に御連絡下さい。地方の作家でも、参加可能です。また受賞歴がなくても「塊」準メンバーとして参加できます。作品・自己紹介文などを送ってください。

連絡先TEL

03:57067847

090:81719771

五十嵐まで

作家集団「塊」プロ作家による作品添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします
懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!

詩1篇	3枚以内 3000円
エッセイ1篇	5枚以内 4000円
	10枚以内 5000円
小説1篇	20枚まで 7000円
	50枚まで 10000円

作家集団「塊」事務局

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13

TEL 03-5706-7847 FAX 03-5706-7848

asiawave@qk9.so-net.ne.jp

受賞の言葉

神通明美

「蕎麦の花」が優秀賞に選ばれましたとのこと、非常に嬉しく思います。

これは、私が小説を書いていると知り応援してくれている高校の同期の一人が、小説の材料にならないかといつて話してくれた体験談を基にして作ったものです。中でも書いていますように大怪我をして、退院後たまたま会ったときには話すのも座っているのもつらそうでした。それ以上の回復は無理なようにも見えたのですが、その後も強靱な精神力でリハビリに励み、今ではカラオケサークルで歌い、無農薬の野菜作りもしているようです。先日も電話をかけてきましたので、この受賞のことを話したら大変喜んでおりました。

私としても恩返しのできた気がして、そういった点からも嬉しく思っております。

書きたいこと、書かなければならないと思うことは次々と出てまいります。これを励みに頑張って書いていきたいと思えます。本当にありがとうございます。



神通明美

じんづう あけみ

本名 西嶋明美

1641 富山市に生まれる

61 から 2002 まで裁判所に勤務

99 「秋徴雨」でとやま文学賞を受賞

2008 「雪解霽」で銀華文学賞奨励賞を受賞

11 「引き渡し」で銀華文学賞奨励賞を受賞

「かいむ」「青嵐」(富山市)「讃岐文学」などの同人誌に作品を発表

現在、文芸誌「ペン」(富山市)同人